

## 特集4

### 連続企画「社会のなかのカリタス」

#### 第1回・第2回 講演録

菊地 了

#### 序文

本稿はグローバル・コンサーン研究所主催の連続企画「社会のなかのカリタス」の講演録である。文章は録音に基づいているが、読みやすさ等を考慮し、適宜、修正と変更を施してある。もちろん、編集すること自体については講演者の許可を得ているし、作業においては講演者の意図に沿うように最大限の配慮をしたつもりであるが、講演者は日本語を解さないため、最終原稿について講演者の確認を得ることはできなかった。そのため、学術的な引用等は本稿に依らず、参考文献で示されている著書や論文を直接に参照していただきたい。

本企画は、同研究所客員所員を務める筆者が、企画と運営を担当している。筆者は、ドイツ・フライブルク大学の神学部でカリタス学の修士号を取得し、また、同学部にて研究補助員を務めたことから、第1回と第2回の講演者をフライブルク大学の古巣から招くこととした。

第1回の講演者をお願いしたクラウス・バウマン教授は、フライブルク大学神学部のカリタス学およびキリスト教ソーシャルワーク講座の主任教授である。バウマン教授が講演でもお話しされているとおり、フライブルクはカリタス学の発祥の地であり、現在もその中心地でもある（ちなみにフライブルクはのちに世界規模となるカトリックの慈善団体「カリタス」の発祥の地でもある）。よって、バウマン教授はカリタス学の権威であり、講演の第1回をお引き受けただけなのは幸いであった。なお、バウマン教授は、フライブルク大学に本務を持つが、フライブルク大司教区の教区司祭であると同時に、心理療法士としての臨床活動も続けており、ご講演で明らかかなように、その視点には理論家としてのみならず実践者としての観点も含まれている。

第2回の講演者のお二人、デオグラシアス・マルフキロ神父とアンドリヤナ・グラヴァス医師は、バウマン教授のもとでカリタス学の学位を取得後、現在も研究員として研究活動を続けている。ブルンジ出身のデオグラシアス神父は、同国で起きた大虐殺を伴う紛争後の和解プロセスを研究し、また、自らが設立した NGO の代表として、その実践にも携わっている。グラヴァス氏は、クロアチア出身の医師であり、人道上的危機的状況が続発したユーゴスラビア紛争を経験し、ドイツに移民してきた経緯を持つことから、トラウマ対処と信仰の関係について研究をしている。

この三人の講演者を招いたのは、もちろん、それぞれの携わる研究や実践について知ってもらいたいということもあったが、(仮想空間を通してではあるが)顔を合わせ、話を聞き、対話することを通して、この三人の人柄に触れ、感化されてほしい、という願いからでもあった。講演録の序文でこう述べるのも皮肉な気もするが、文字で捉えきれないものが、人との出会いには(例えオンラインであっても)確かに存在するのである。ぜひ、読者の皆様にも、もし本稿をご覧になってご関心を持たれたら、当研究所のホームページをご参照の上、ご参加いただければと思う。

個人的な感想であるが、第1回と第2回を通してもっとも印象的であったのは「癒し」というキーワードであった。宗教は救いをもたらすはずである。しかし、「救済」というと、現代の世俗化された世界では、上から目線で、彼岸的なイメージがもたれがちであろう。例えば、「信じれば天国に行けますよ」とか「そんなことでは地獄に落ちますよ」とかいう類のメッセージを想起する人が一般には多いのではないか。しかし、私自身カトリック信者であり、プロテスタントや正教の人たちとも交流があるが、そのようなことを言うキリスト者にはほとんど会ったことがない。私の周りのキリスト者は、代わりに、「辛いことがあれば教会に行けば、心が楽になるかもしれませんよ」とか「神様のいない世界は殺伐としていますね」とか言うのである。つまり、大勢の人々は、来世に救われるよりは、現世で癒されることに、信仰の意義を見出しているようである。

「世俗の時代」と言われることもある現代であるが、たくさんの方が、癒しを求めて、教会や寺院を訪れたり、ヨガや瞑想をしたりして、スピリチュアルな生活を送っている。バウマン教授の話にあった、弁証法的行動療法を開発した心理学者マーシャ・リネハンの原点が祈りの最中での神秘体験であったという話は、劇的な例ではあるが、少なくとも私が見聞きしてきた限り、珍しい話ではない。私事で恐縮であるが、私自身、無神論者のニーチェ研究者として虚無主義に苛まれていた時に、突如、十字架に架けられたキリストから強烈な光が輝き出る経験をしたことが、キリスト者として歩み始める第一歩であった。そして、信仰の道を歩む途上、キリストに癒された人、癒されている人との、多くの出会いがあった。

近年、学術界においても、人間存在の宗教的側面が、注目されるようになってきている。近代では動物的・経済的な存在として解されることが多かった人間のスピリチュアルなニーズがようやく認められてきているようである。筆者は先日ある哲学の講演会に出席したが、そこでも「実存」という専門用語とともに、「スピリチュアル」という身近な言葉が、否定的な意図を伴わずに使われていたのは、非常に新鮮であった。グラヴァス医師の研究もドイツで開催された欧州精神医学会の会合でとても良い反響を得たと聞いているが、バウマン教授も述べているように、カリタス学では当初から宗教性を含む全人的な人間観に基づき経験的な研究がされてきたため、我々がそこから学べることは多いであろう。

平和には赦しが必要であるが、癒しと赦しには密接な関係があり（赦しが先か、癒しが先かはわからないが）、そこではスピリチュアリティが重要な役割を担っている、と、講演者たちは口を揃えるように言っている。スピリチュアリティを切り離さない人間学の必要性をバウマン教授は訴えているが、キリスト教人間学を専門の一つとする研究者として、これには全く同意である。苦しんでいる人の多くにはスピリチュアルなニーズがあることは明白であり、苦しむ人々に寄り添うことを旨とする人は、それを無視することは到底できないはずである。これはカリタス学のモットーでもあるが、日本で隆盛しているグリーフケアにも共通している、大切な理念でもあろう。そして、キリスト教人間学の伝統を誇り、グリーフケア研究所を擁する上智大学は、このような学問的アプローチの砦であるべきであろう。ゆえに、グローバル・コンサーン研究所という社会活動を実践し、研究する場で、チャリティとスピリチュアリティの関連を「カリタス」というカトリックのキーワードを通して探っていくことに、筆者は深い意義を見出すのである。

【フライヤー】



Caritas in Society

社会カリタス

のなかの

の

連続企画「社会のなかのカリタス」 Webinar Series: Caritas in Society  
**第1回 カリタス学とは何か? What is Caritas Science?**

[日時] 2021年 **11月18日**(木) 18:00-19:30  
[対象] 高校生・大学生・大学院生・一般の方・研究者・その他  
[予約] **要事前予約**(グローバル・コンサーン研究所HPにて) Please register at the Sophia IGC website in advance.  
※講演は英語ですが、司会による簡単な通訳が付きます。また、必要に応じて30分程度延長されることがありますので、あらかじめご了承ください。  
\* The Q&A session will be extended until 8 pm if necessary.

**社会**において神愛はどのように具現化されるかを探る連続企画「社会のなかのカリタス」。第一回では、カトリック司祭であり、心理療法士でもあるクラウス・パウマン教授(ドイツ・フライブルク大学神学部)を講師として招き、「カリタス学」についてご紹介いただきます。学際的な研究領域であるカリタス学は、キリスト教のチャリティーに関する理論と実践を研究することを目的としています。具体的には、パウマン教授が主任教授を務めるフライブルク大学カリタス学研究科の構想や歴史、教育プログラム、そして、教授の最新の研究プロジェクトである「霊性とケア」などについてお話しいただく予定です。

**What is Caritas Science?** Professor Klaus Baumann, a Catholic priest and psychotherapist, will introduce us to Caritas Science, an interdisciplinary academic field focusing on the study of theory and practice concerning Christian charity. He will talk to us about the concept and history of the Department of Caritas Science at the University of Freiburg which he heads, its educational program, and his latest research projects concerning spirituality and care.



クラウス・パウマン教授 (ドイツ・フライブルク大学神学部)  
**Prof. Klaus Baumann** (Faculty of Theology, University of Freiburg, Germany)

[主催] Institute of Global Concern, Sophia University [共催] Department of Caritas Science, University of Freiburg



## Sophia Open Research Weeks 2021

5<sup>th</sup> Nov.— 23<sup>rd</sup> Nov. Sophia University





社会  
のなかの



カリタス

連続企画「社会のなかのカリタス」 Webinar Series: Caritas in Society

第2回 人道危機後の赦しと信仰 Faith and Forgiveness After Humanitarian Crisis

〔日時〕 2022年3月3日(木) 18:00-19:30

〔対象〕 高校生・大学生・大学院生・一般の方・研究者・そのほか

〔予約〕 要事前予約(グローバル・コンサーン研究所HPにて) Please register at the Sophia IGC website in advance.

※講演は独語ですが、司会による簡単な通訳が付きます。また、必要に応じて30分程度延長されることがありますので、あらかじめご了承ください。

\* The lectures will be in German. Q&A session will be extended until 8 pm if necessary.

社会において神愛はどのように具現化されるかを探る連続企画「社会のなかのカリタス」。第二回では、カリタス学の拠点ドイツ・フライブルク大学で研究員を務める二人のゲストにカリタス学の最新の知見についてお話いただきます。ブルンジ出身の平和活動家デオグラシアス・マルフキロ神父は、平和と和解における宗教の役割について、クロアチア出身のアンドリヤナ・グラヴァス医師は、トラウマ対処における霊性の役割について研究されています。ブルンジ大虐殺とユーゴスラビア紛争という人道危機後の平和構築における信仰に根ざした赦しの可能性についてお二人から学び、ともに考えてみませんか。



デオグラシアス・マルフキロ 神父 Déogratias Maruhukiro, ISch, PhD

カトリック司祭、Rapred-Girubuntu 代表、フライブルク大学研究員、学術博士、ブルンジ出身。  
著書に *Für eine Friedens- und Versöhnungskultur: Sozial-politische Analyse, ethischer Ansatz und Kirchlicher Beitrag zur Förderung einer Friedens- und Versöhnungskultur in Burundi* (Lit, 2020) 等がある。



アンドリヤナ・グラヴァス 医師 Andrijana Glavas, Dr. med.

医師、フライブルク大学研究員、医学博士、クロアチア出身。  
最新の研究成果 "Spiritual Needs in Postwar Population Posttrauma Patients in Croatia and Bosnia-Herzegovina" が *Spiritual Needs in Research and Practice* (Springer, 2021)に所収されている。

〔主催〕 Institute of Global Concern, Sophia University 〔共催〕 Department of Caritas Science, University of Freiburg



## 第1回

### カリタス学とは何か？

クラウス・パウマン（ドイツ・フライブルク大学教授）

（2021年11月18日開催）

#### 【パウマン教授】

「カリタス学とは何か？」これが私に与えられたテーマです。そこで、まず、カリタス学の歴史やカリタス学とは何かということ、さらに、カリタス学の学際的な方向性、そして、我々の最新の研究プロジェクトについてお話したいと思います。

まず、カリタス学の歴史についてですが、特にフライブルクについてお話したいと思います。フライブルクはこの学問の発祥の地だからです。カリタス・ドイツの創設者であり、初代会長であった、ロレンツ・ヴェルトマンは、カリタス学について次のように語っています。「カリタスと社会福祉の分野における学術的な研究は、ほとんどまだ扱われていない課題であることは否定できない」彼は1902年にこう言いましたが、これは今でもそうです。

カリタスの主要な分野は三つあります。第一に、福祉セクターにおける社会奉仕。第二に、教会と社会における連帯の醸成。第三に、社会的政治的アドボカシー活動、特に政府による社会立法の改善の促進。よって、カリタス学は、これらすべてのカリタスの分野を研究対象としています。

カリタス学がフライブルクで始まった時代には、産業革命が社会的な背景としてありました。より具体的に言うと、19世紀の中欧における農村の貧困と都市の労働者階級の貧困によるいわゆる「社会問題」があったのです。1880年代に、ドイツはマルクス主義革命を回避するため、社会保障制度の整備と社会福祉国家の成立を目指すようになりました。19世紀末には、政府は宗教的な福祉団体と協力するようになりました。同時に、教会においても、多くの新しい社会サービスが生まれ、社会問題に対する意識がより鮮明になりました。1891年、ローマ教皇レオ13世による回勅「レールム・ノヴァールム」が制定され、カトリック社会教説の発展が始まりました。

1848年には、すでにドイツのプロテスタント教会が、プロテスタントの社会奉仕活動の統括組織として、「内地宣教のための中央機関」を設立しています。1897年、カトリックの組織に対する政治的な受容性の高まりにあわせて、ドイツ・カリタスが設立されました。ドイツ・カリタスは、約20年後、第一次世界大戦中に司教会議によって承認されました。第一次世界大戦は、司教たちだけでなく、ドイツ社会にも、戦争の結果生じるあらゆる必要に対処するために、社会的分野での教会の奉仕がいかに重要であることを示したのです。

1918年、フライブルク大学神学部において、道徳神学者フランツ・ケラーが、社会倫理とカリタス学の教授に任命されました。1922年末、カリタス・ドイツのベネディクト・クロイツ会長は、フライブルク大学にカリタス学の研究所を設立するよう嘆願書を提出しました。その理由は、カリタスの専門的な奉仕活動には、「その拡大と実践的な活動全般によって緩んでしまわないように」、科学的、特に神学的な基礎固めが必要である、ということでした。

1925年4月3日、フライブルク大学は神学部内にカリタス学の研究・教育を目的とする研究

所を設立しました。この研究所では、4学期制のカリキュラムが設けられ、補助的なディプロマを取得することができました。1927年、ベルリンのフンボルト大学でプロテスタントの社会倫理と内地宣教学の研究所が誕生しました。これはフライブルクの研究所のプロテスタント版と言えるものです。

ナチス政権下の1938年、両研究所はナチスによって弾圧され、活動を禁じられました。フライブルクとベルリンのこれらの研究所以外には、神学の学問や研究所が弾圧されることはありませんでした。ナチス政府は、カリタス学のテーマや教えが、ナチスのいかなる立場にも反するものであり、面倒を起こすかもしれないことを直ちに理解したのです。

第二次世界大戦後、研究所は段階的な再出発の道を歩みました。プロテスタントの研究所は1954年にハイデルベルクに移されました。カリタス学のプログラムは、教会の認可に加えて、1993年には州の認可も得ました。2006年、これは私の最初の重要な任務の一つでもありましたが、ボローニャ改革を受けて、カリタス学の修士課程が設立され、政府の認可を受けました。

さて、これまでは簡単にカリタス学の歴史を見てきましたが、それでは、カリタス学とはそもそも何なのでしょう。「カリタス」という言葉は、「チャリティ」という言葉と誤解されやすいです。我々は「チャリティ」ではなく、「カリタス」と言います。「カリタス」とは、七十人訳聖書のコイネーギリシャ語の「アガペー」のラテン語訳です。特に神の私たちへの愛、神への愛、隣人への愛を指します。これがカリタスの意味です。

教皇ベネディクト16世は、その最初の回勅で、隣人愛の実践は信者個人の責任でもあるが、地域レベルから世界レベルまで、教会としての責任でもあり、また、教会はコミュニティとして組織的に愛を実践しなければならない、と述べています(20)。ベネディクト16世のこの考えは、第二バチカン公会議の教会論にある、秘跡的にそして司牧的に統一体である教会という教えと同一線上にあります。神の愛にインスピレーションを受け、カリタスにインスピレーションを与える教会。第二バチカン公会議は、教会憲章の中で、教会を「キリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるし、道具」(1)と定義しました<sup>1</sup>。

道具(*Instrument*)という言葉に注目してみましょう。道具というのは、自分が必要とする特別な範囲のために使うものです。使わなければ、何の役にも立ちません。現代世界憲章は「現代の人々の喜びと希望、苦悩と不安、とくに貧しい人々とすべての苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、苦悩と不安でもある」という言葉で始まっています<sup>2</sup>。これら引用に示される教会論は、一枚のコインの表と裏になっています。教会は、貧しい人々や苦しんでいる人々に寄り添い、どのような形であれ援助する道具である必要があるのです。

この道具はどうすればうまく使えるのでしょうか。この仕事はどうすればうまくできるのでしょうか。これらの問いに答えるためには、研究が必要です。そのため、カリタスの研究が必須であると、ヴェルトマンは語りました。繰り返しになりますが、教会の秘跡的使命はカリタスの道具となることなのです。

<sup>1</sup> 第2バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会訳『第二バチカン公会議 教会憲章』カトリック中央協議会(2014)。

<sup>2</sup> 第2バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会訳『第二バチカン公会議 現代世界憲章』カトリック中央協議会(2014)。

では、カリタス学とは何なのでしょう。まず、科学とは何かを確認する必要があります。大学が「科学」という言葉で理解するものは何でしょうか。科学の中心は、新しい知識を得るための方法と推論を結びつけることです。断言を結びつける構造の論理で、理論を構築することです。どんな科学も、どんな学問分野も、この方法と推論の結びつきの構造を持っています。

科学の諸分野には目標があり、対象があり、方法があります。フンボルトが定義した大学の理想像によると、大学には三つの目標と責務があります。それは、研究、研究に基づく教育、若手研究者の育成の三つです。これらはカリタス学の目標でもあります。カリタス学の対象は、教会の本性の遂行であるカリタスであり、教会と社会における結社的コミットメントです。特に、この対象には、苦しむ人間、支援する人間、そして医療や社会福祉におけるコミットメントを含むあらゆる種類の貧しい人々や抑圧された人々に奉仕する教会とその活動が含まれます。

別の言い方をすれば、「社会問題への対処と解決」が対象に含まれるのですが、それはソーシャルワークの対象でもあります。このソーシャルワークの対象は、カリタスの仕事は何であるかを考える上で重要なポイントになります。カリタスの仕事とソーシャルワークは、大きく重なる部分があります。ソーシャルワークの教科書の定義と国際ソーシャルワーカー連盟の定義を合わせて考えると、ソーシャルワークの対象は、社会問題の予防と対処と社会発展の促進であると考えられます。ソーシャルワークについては、エンゲルケが教科書の中で、「私の知る限り、学問領域としてのソーシャルワークの発展、実践、専門職の形成に対する神学の貢献は、過大評価することはできない」と書いています。

さて、カリタス学者は何を研究するのでしょうか。カリタス学は、カリタス、つまり、キリスト教の社会福祉活動の理論と実践を、記述し、説明し、理解し、改善し、建設的に変化させることを目的としています。そして、そのためには、教会のカリタスについての純粋に神学的な理解に従うことが必要です。同時に、カリタス学は、この神学的自己理解をさらに明確にし、深め、発展させることを神学的に追求しています。

ご存知かもしれませんが、1979年に教皇ヨハネ・パウロ二世がカトリックの大学・学部について定めた使徒憲章「サピエンティア・クリスティアナ」は、カリタスを明確に扱った研究領域については何も語っていませんし、カリタスについての言及もしていません。その結果、カリタス学も、一般的にカリタスというテーマ自体も、カリキュラムの一部になっていません。

ソーシャルワークを専門とするカトリックの応用科学大学は存在します。また、カトリックの組織に勤める神父やソーシャルワーカーもいます。しかし、かれらは皆、カリタス学が何なのか知らないのです。神学として、また、学際領域としてのカリタス学を、かれらはしばしば知らないのです。

一方、教皇フランシスコは、2017年にサピエンティア・クリスティアナの後継として、使徒憲章「真理の喜び」で、教会とその神学部に新たな刺激を与えました。教皇は同文書で神学部の課題を定義していますが、そこには「神学部は、神の啓示から細心の注意を払って導き出されたカトリックの教義を、それにふさわしい科学的方法に従って深く研究し、体系的に説明することを目的とする」(69)と書かれています<sup>3</sup>。この一文はサピエンティア・クリスティアナ

<sup>3</sup> 拙訳。

と一致しています。

そして、次の文には、サピエンティア・クリスティアナでは明示されていなかった、第二の目的が書かれています。これはカリタス学に強い関連性があります。「同じ啓示に照らして、人間の問題の解決を注意深く求めるといふさらなる目的がある」<sup>4</sup>。上述したように、エンゲルケは、「ソーシャルワークに対する神学の貢献は過大評価できない」と言っていますが、同時に、「神学は、特定の条件のもとでなければ、ソーシャルワークが参照する学問となりえない」とも言っています。それでは、この「特定の条件」とはどのようなものなのでしょうか。

こうして、我々は、研究上の問いの特性に応じたカリタス学の方法にたどり着きました。カリタス学の研究活動には、神学及び神学以外の学問領域との協力が不可欠です。他の学問領域の知見と手法はカリタス学の学術的方向性を定める際に必要となります。そして、学際的な作業は、認識論的に考察され、説明されなければなりません。

ここで、カリタス学の特徴としての学際志向についてお話します。簡単に言いますと、カリタス学には、神学と経験科学の二つの部門があります。そして、これらは互いに学際的に影響し合っています。ソーシャルワーク（ヘルスケアも含む）は、社会問題への対処や解決、社会的発展の促進を目的としています。これらは私たちの目的でもあり、他のすべての学問分野と協働しています。

カリタス学は、現在、神学の中の学問であり、社会問題の解決と対処という目的に関連する他のすべての学問と密接に相互作用しています。カリタス学は、神学的な背景とインスピレーションをもちながらも、その対象はソーシャルワークと同じであり、様々な学問分野と相互作用しながら活動しているのです。

カリタス学の修士課程のカリキュラムでは、多くの学問分野と対話しながら、様々な技能分野からなる育成プログラムを作らなければなりません。まず、中心となるのは、カリタス学の研究能力です。これは修士論文によって最終的に証明される能力です。しかし、この中心の周りには、6つの技能分野があります。第一に、神学と神学的人間学があります。第二に、社会倫理学。第三に道徳神学。第四に、コミュニケーション。第五にソーシャルワーク。第六に、法学と経済学です。カリタス学の修士課程ではこれらのことを学ぶのです。

学際的な学びにおいて、カリタス学は『対異教徒大全』に示された聖トマス・アクィナスの信念に忠実です。「被造物についての誤りは、神についての誤った意見に流れ込み、人間の精神を迷わせ、信仰がその御前に導くべき、神から遠ざけてしまう。」この信念のもと、カリタス学は、世界の現実について他の学問から学ぶことに非常に積極的な姿勢でいるべきでしょう。

ゆえに、カリタス学は、本質的に、他の学問分野とその成果から学び、自らの前提や考え方や行動様式を反省する心構え、学際的態度を必要としています。新しい知識や新しい洞察がソーシャルワークとその対象にとって何を意味するのか、その意味を考える用意がなければなりません。そして、その態度はネガティブな研究結果や他分野からの挑戦を避けるものであってはいけません。

一方、課題と言説のレベルを見極める能力も必要です。課題が置かれているレベルは何なの

---

<sup>4</sup> 拙訳。



か。そして、必要な情報や結果を他分野から得るために、重要な問いに集中し、明確な質問をする能力がカリタス学者には必要なのです。

私は、1904年から1984年まで生きたイエズス会士のバーナード・ロナガンに倣って、私たちの心の営みを4つのレベルに分類することを提案しています。第一に、経験的なレベル、第二に、理解のレベル、第三に、持続的なレベル、そして第四に、責任のレベルです。これは学問の対話において、「相手の学問は経験的事実を語っているのか」、「この経験的データに対する理解を語っているのか」、「評価の問題なのか、それともすでに責任と決断の問題なのか」を理解するために非常に有効だと考えます。

ここで、最新の研究プロジェクトの話に移りたいと思います。私の研究プロジェクトと私のグループの研究プロジェクトをいくつか挙げます。これらの研究プロジェクトに関しては、ドイツ語に加えて英語の出版物もあります。

ある研究プロジェクトは、青年期の親と子どもたちとの生活を対象としました。また、外出が許されない定住型施設にいる青年を扱ったプロジェクトもありました。これらは困難な生活を営む青年についての研究です。

次に、より大規模なプロジェクトですが、「精神医学と心理療法における宗教とスピリチュアリティ」というプロジェクトがあります。これは現在も続いています。このプロジェクトでは、ドイツ全土の精神科医を対象に調査を行いました。ドイツの精神科で働くパストラル（司牧）ワーカーにもアンケートをとりました。また、フライブルク大学の大きなクリニックで、精神科の患者さんたちにも調査を行いました。

これらの調査の後、南東ヨーロッパのクロアチアとボスニア・ヘルツェゴビナで、ボスニア帰還兵の精神科の患者さんにおける宗教性とスピリチュアリティの役割に関する新しいプロジェクトが始まりました。さらに、医療における心理社会的・精神的需要や資源をどのように支援するかという問題についての学際的研究グループにも加わりました。

また、私はドイツ教会司牧調査の主任研究者の一人です。現在、5つの大きなプロジェクトがあります。一つ目は、ドイツにおけるコロナ・パンデミックによる喪失と喪と悲嘆に関する調査です。二つ目ですが、今、ちょうど、フライブルク大学の成員のコロナパンデミックに対する態度や反応についての調査結果を発表しようとしているところです。三つ目は、アフリカの大湖地域における平和と和解を扱っています。特にルワンダとブルンジでジェノサイドと内戦に苦しんだ人々の和解に教会はどのように貢献できるのかという問いを探っています。また、21世紀における高齢化の問題を扱うプロジェクトもあります。キリスト教の観点から、加齢を肯定的にどう捉えるかを探究しています。

五つ目ですが、私はフライブルクベーシックインカム研究所の責任者の一人です。私の専門はケアとベーシックインカムです。社会の中でケアワークという仕事が尊重され、正しく評価されるようにするにはどのようにすればよいのかという問いを扱っています。ケアワークとは、例えば、家族内で世代間で行われている子どもや高齢者等の世話を指します。例えば、ドイツでは、通常、ケアワークは女性によって行われていますが、その対価は支払われていません。それは、例えば、老齢年金の支給を受ける際の損失につながっています。ケアワークが社会的に公平に補償されるにはどうしたらいいのでしょうか。私たちは皆、このケアワークが社会的

結束や私たち一人ひとりの心理社会的発達のために大切であることを知っています。しかし、私たちの社会で支配的な経済的思考によって、ケアワークは疎外されているのです。

それでは、質疑応答に移りましょう。何かご関心を持たれた研究プロジェクトがあれば、より詳しくお話することもできます。

#### 【参加者】

クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナのトラウマを受けた方たちの精神医学的な対象者の方の宗教とスピリチュアリティの役割を調査されたというお話がありましたが、その結果について何かあればお話しください。また、スピリチュアリティがカリタス学の中で占める位置付けについて先生はどのようにお考えでしょうか。

#### 【バウマン教授】

まず、一つ目の質問ですが、この研究の結果はもちろん複雑なのですが、和解には特に3つのことが必要だとわかりました<sup>5</sup>。第一に、民族紛争は口実だということを発見する、あるいは明らかにする必要があります。民族紛争は、本当の理由ではなく、道具化されています。フツとツチの間の民族紛争は、政治によって道具化されているのです。紛争の本当の理由ではないのです。第二に、平和と和解のためには、貧困との戦いや貧困の克服が必要です。これには教育も関連しています。第三に、信頼できる司法制度が必要です。政治における腐敗が克服されなければなりません。

これらの要素が一つでも欠けると、努力は持続しません。ですから、様々な要素を同時に取り入れたアプローチが必要なのです。教会は、貧困との戦い、教育への奉仕、不正なシステムの指摘、不当な扱いを受けている人々の擁護、そして信頼できる良い統治を支持することなど、重要な役割を担っています。そして、教会コミュニティの中でも、民族差別を克服する必要があります。

次に、二つ目の質問ですが、カリタス学の中でスピリチュアリティは非常に中心的な役割を担っています。第一に、カリタス学者は、自分自身が霊的に生きる人間であるべきです。第二に、スピリチュアリティを研究の対象とすることで、人間学にスピリチュアリティの側面を取り入れないと、人間をよく理解できないということを理解するべきです。特に、苦しんでいる人は、スピリチュアルなニーズを持っている人であり、治療や支援にスピリチュアルなニーズをうまく取り入れる必要があるのです。そうすれば、スピリチュアリティは人々のエンパワメントや解放の一部となるのです。

#### 【参加者】

カリタス学は学際的ということですが、最近バチカンでも取り上げられ、注目されているインテグラル・ヒューマン・ディベロップメント（総合的人間開発）との関連についてお聞きし

---

<sup>5</sup> 翻訳を務めた筆者が混乱し、アフリカの紛争について聞いてしまったため、バウマン教授はこれについて答えている。

たいです。

**【バウマン教授】**

おっしゃる通り、現在、バチカンには総合人間開発省があります。これは教皇庁の正義と平和、開発援助、移住者、医療にかかわっていた4つの評議会を前身として構成されています。この新たな省では、4つの組織で行われた仕事をすべて再編成する過程にあり、私はドイツ司教協議会の顧問であるため、助言を頼まれました。以前から、開発援助促進評議会と保健従事者評議会の間には非公式ですが継続的なつながりがありました。また、例えば様々な会議を通して、より正式なつながりもありました。彼らはカリタス学を知っていて、私たちにも声をかけてくれますし、私たちから彼らに声をかけることもあります。同省は聖座の一部であるのに対して、カリタス学は自由な学問分野です。

**【参加者】**

カリタス学は基本的に学術的な枠組みであり、総合人間開発は実践的であることは理解していますが、この二つの間に何か違いや関連性はあるのでしょうか？

**【バウマン教授の応答】**

フランシスコ教皇が教皇庁の改革を打ち出したとき、私はすぐに上述の4つの評議会を一つにすることを提案しました。もちろん、教皇が私と直接話をしたわけではありませんが、私は、バチカンの様々なモンシニョール（高位聖職者）、また、これらの評議会の元議長たちと話をしたのでした。

フライブルクのカリタス学と新しい総合的人間開発省の間には、組織的なつながりはありません。また、この省はまだ組織として初期の段階にあります。タークソン枢機卿を補佐するシスターが新たに任命されるなど、現在様々なことが進んでいます。同省で行われている活動は非常にグローバルなものです。私たちは学術活動を奨励していますが、同省に関心を持たれる問いを扱っています。私たちは、カトリックの教義の観点からだけでなく、経験的なレベルから総合的人間開発について考察します。私たちは実証的な研究を行い、その結果をまた神学的に考察します。私たちは、経験的現実について洞察することで、第二バチカン公会議で述べられているように、カトリックの教義を、より人々の経験的な生活の現実に根ざしたものにできるのです。

**【参加者】**

コロナ・パンデミックとスピリチュアリティについて教えてください。

**【バウマン教授】**

コロナ・パンデミックに関しては、論文を数本発表しています。パンデミックの波におけるスピリチュアリティの発展について、精神医学の専門誌に2本の論文を発表しました。最初の波では、短期間ではありますが、多くの人にとってスピリチュアリティが活発になりました。

しかし、第2、第3の波では、最初の勢いが弱くなりました。これはスピリチュアルな生活に一般的に言えることでもあります。コロナ・パンデミックの間には、スピリチュアルな生活を始めようと思ってもすぐにその熱意を失ってしまう人と、より着実に、持続的にスピリチュアルな実践を行う人がいるということです。これは統計的に実証されています。

このようなスピリチュアリティの減退は、福音の種まきのたとえに似ていると思います。異なる土地に落ちた種は、成長したり、しなかったりするのです。これを経験的に証明することができるのです。とても興味深いことです。

最初の頃は、瞑想や自然の中で過ごす時間、創造物の不思議や美しさを考える時間を増やそうと多くの人が思っていたのに、第2、第3の波では、そういったことが少なくなってきました。スピリチュアルな面でも疲労が蓄積していると言えるでしょう。長期のパンデミックによる疲労です。

#### 【参加者】

1938年にカリタス学の2つの施設がナチス政府によって弾圧されたとき、どのような反応があり、どのような行動が取られたのでしょうか？

#### 【バウマン教授】

フライブルクの研究所とベルリンのディアコニア学（カリタス学のプロテスタント版）の研究所は大学の機関でした。フライブルク大学は懸命に政府と話し合い、弾圧を避けようとしたのですが、フライブルク大学自体がすでにナチスの大学であった部分もあり、弾圧を避けることはできませんでした。

神学者たちは、神学部が存続できることで満足していたのですが、学生たちは強い不満を感じていました。彼らは1938年以降も卒業資格を得られると保証されていたのですが、その時の学生の中には、ユダヤ人家族の移住のために密かに働いていたために、ナチスの迫害の犠牲者になった人もいたため、政府はかれらを疑っていたのです。

また、思想的にナチスのイデオロギーを受け入れていた学生もいました。カリタスの学生の中にもナチスの学生がいて、彼らは新たな独裁的な体制に入り込むための場所を見つけたと考えました。カリタス学研究所にも、政権に協力的な学生とそうでない学生が混在していました。

初代教授のフランツ・ケラーも、その次の教授も、ナチス政権によって失脚してしまいました。神学部で椅子を追われたのは、かれらだけでした。後継者である私にとって、かれらが失脚させられたこと、ナチス政権が無視できなかったほど、カリタス学という研究領域がナチス政権と相容れないものであったことは、名誉なことです。障害者や病者や高齢者の扱いや、人種的正義など、カリタス学が社会生活について示唆することは明確だからです。

ちなみに、ベルリンの研究所については、ドイツのプロテスタント教会は常にカトリック教会よりも国家と近い関係にあったので、その抗議はフライブルクでの抗議よりもさらに限定的なものでした。

#### 【参加者】

性暴力によってトラウマを負った人々についての研究はありますか。性的被害を受けた人た

ちにとって、信仰は癒しへとつながることがありますが、このことについての研究はされていますか？

【バウマン教授】

性的トラウマとその治療に関する最近の研究としては、トラウマ後のストレス障害や複雑な障害に関するスピリチュアリティや宗教性の問題についての研究があります。また、現在取り組みが始まっている博士論文も、ドイツへの移住者で、クリスチャンではないのですが、ヨガのメソッドを実践している女性たちについて、これらのメソッドがもたらすスピリチュアルな影響が、彼女たちの癒しにどのように役立つのかというテーマを扱っています。

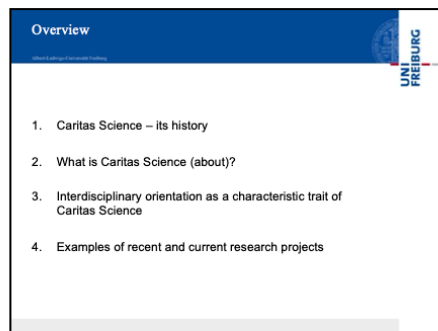
多くのトラウマを抱えた患者が、マインドフルネスに基づくエクササイズを用いています。このエクササイズを始めた二人のうちの一は、マーシャ・リネハンという心理学者です。マーシャ・リネハンは、カトリック教徒でしたが、彼女自身も若い頃に精神病を患っていました。彼女は深い問題を抱えていましたが、その癒しの第一歩はチャペルでの祈りの体験でした。彼女が祈りの中で体験したことは、私たちが神秘体験と呼ぶようなものですが、60年代や70年代のアメリカではセラピーにおけるそのようなスピリチュアルな体験に関する疑念がとても強かったため、慎重な彼女はそのことについては語りませんでした。しかし、彼女の開発したマインドフルネスをベースにしたエクササイズを用いた弁証法的行動療法の根底にあるのは祈りにおける神秘的体験であり、老齢のいま、このことについてオープンに語っています。

キリストに祈っているときに光を見たという彼女は、「自分は愛されているのだから、自分を愛することができる」という確信を得ました。しかし、このようなことは通常は科学では受け入れ難いことです。ですから、私たちは実証的な研究に全力を尽くし、患者さんたちに、スピリチュアルなニーズや実践方法、それが彼らにとってどういう意味を持つのかを、あらゆる角度から尋ねています。そして、患者さんが自分の状況にうまく対処するために、スピリチュアルなことが大いに役立つことを発見したのです。

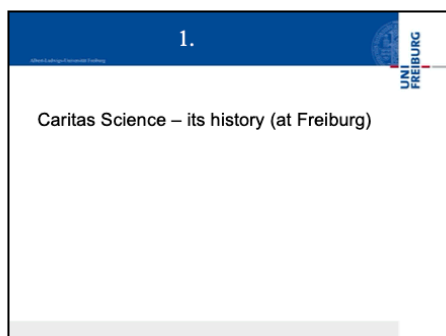
【配布資料】



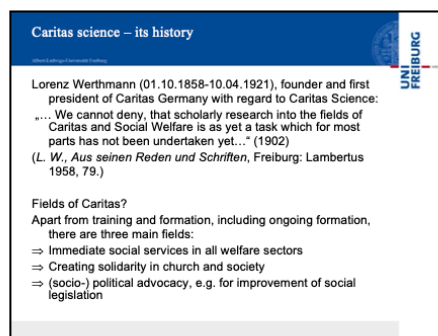
1



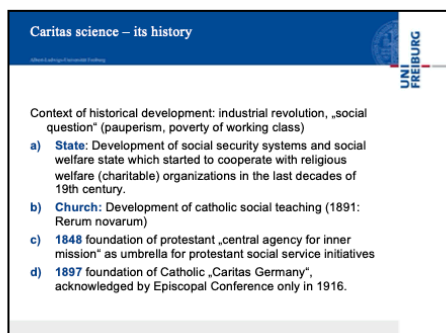
2



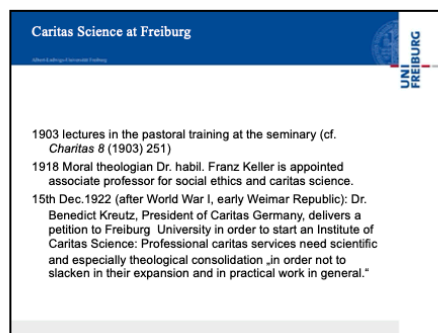
3



4



5



6

Caritas Science at Freiburg

03rd April, 1925 „Installation of the Institute for Caritas Science in connection with the Faculty of Theology“ at Freiburg University; goal: Research and teaching in the area of caritas.  
Curriculum of 4 semesters to obtain a supplementary diploma  
1927: „Institute for social ethics and the science of Inner Mission“ at Humboldt University Berlin (Reinhold Seeberg)

7

Caritas Science at Freiburg

1938: Suppression of both institutes by the Nazi-government (no other theological discipline/ institute was suppressed)  
1945 – stepwise relaunch of the Institute (1954 – Institute of Diaconic Studies in Heidelberg as successor of the former Berlin institute)  
1993 state approval of the diploma in Caritas Science  
2006 (Bologna reform process) MA Caritas Science and Ethics  
2012 (Zeva) – 2016/17 (Acquin) further state accreditations

8

2.

What is Caritas Science (about)?

9

Caritas and Caritas Science

“caritas” is the latin translation of the Koinè Greek word “agape” with its special use and meaning of the Septuaginta (LXX)-translation of the Hebrew Bible and especially of the New Testament: It is used specifically for God’s Love to us, for our love to God and for our love of neighbor.

10

Caritas and Caritas science

“Love of neighbor, grounded in the love of God, is first and foremost a responsibility for each individual member of the faithful, but it is also a responsibility for the entire ecclesial community at every level: from the local community to the particular Church and to the Church universal in its entirety. As a community, the Church must practice love. Love thus needs to be organized if it is to be an ordered service to the community.” (Benedict XVI, Dce 20)

11

Vatican II has proposed a jointly sacramental and pastoral ekklesiology – inspired by God’s love and inspiring Caritas

“...the Church is in Christ like a sacrament or as a sign and instrument both of a very closely knit union with God and of the unity of the whole human race.” (Lumen gentium n. 1)



“The joys and the hopes, the griefs and the anxieties of the men of this age, especially those who are poor or in any way afflicted, these are the joys and hopes, the griefs and anxieties of the followers of Christ.” (Gaudium et spes n. 1)

Werthmann: Research into the fields of Caritas is mandatory!

12

**What is science/ a scholarly discipline?**

Central: the connection of method (towards new knowledge) and reasoning (logic) in the structure which builds the connection among affirmations

Object  
Goals  
Methods

Science/ scholarly disciplines at the „University“ (W.v.Humboldt) have three goals and tasks especially:

1. Research,
2. research based teaching,
3. promotion of young academics

13

**Definition Caritas Science - part 1**

Caritas Science serves research and teaching in its manifold area and the promotion of young academics.  
The **object** of Caritas Science is the Caritas as vital realization of the Church and as associational commitment within Church and society.

In particular, this object includes  
the human being who suffers  
the human being who helps  
the Church and Her mission at the service of "the poor and oppressed of any kind" (Gaudium et spes 1), including Her commitment in health care and social welfare.

This object includes: „Coping with and resolving social problems“ (E. Engelke), their prevention and the promotion of social development – i.e. the object of social work

14

**Theology and Social Work (Baumann 2021, 25)**

Engelke et al. (2016) identify the **object of social work** as preventing and coping with social problems, while the International Federation of Social Workers (2014) defines it as follows: "Social work is a practice-based profession and an academic discipline that promotes social change and development, social cohesion, and the empowerment and liberation of people".

Combining both: the object of SW is "Preventing and coping with social problems, promoting social development"

„The contribution of **theology** to the development of **social work** as scholarly discipline, practice and professional formation cannot be overestimated, to my knowledge.“ (Engelke, Ernst (2003) Die Wissenschaft Soziale Arbeit. Werdegang und Grundlagen, Freiburg: Lambertus 2. Aufl. 2004, 435).

15

**Definition of Caritas Science – part 2:**

The **goals** of Caritas Science are its **activities** of:  
describing  
explaining or understanding  
improving or changing constructively  
the theory and the practice of "Caritas", of Christian social work and welfare,  
according to a **genuinely theological understanding of the Caritas** (social mission) of the Church.  
At the same time, Caritas Science seeks to further clarify,  
**deepen and**  
develop this **theological (self-) understanding** by its activities.

16

**Caritas Science in the canonical curriculum of Catholic Theology**

The apostolic constitution „*Sapientia Christiana*“ (JP II, 15.04.1979) on Catholic Universities and Faculties does not know of a scholarly discipline which explicitly treats Caritas or diakonia.


In consequence, neither caritas science nor (in general) the topic of Caritas itself are part of the curriculum.

There exist Catholic Universities of Applied Sciences with specializations in social work – and wonder: what is Caritas Science? The same with pastoral and social workers in Catholic institutions

17

**Caritas as study object of theology.  
Caritas in need of and seizing on science.**

„A Faculty of Theology has the aim of profoundly studying and systematically explaining, according to the scientific method proper to it, Catholic doctrine, derived with the greatest care from divine revelation. It has the further aim of carefully seeking the solution to human problems in the light of that same revelation.“ (VG 69)



Pope Francis, Apostolic Constitution „*Veritatis Gaudium*“ (December 8th, 2017)

18



Engelke 2003, 435:

„The contribution of **theology** to the development of **social work** as scholarly discipline, practice and professional formation cannot be overestimated, to my knowledge.“ (435)  
 At the same time:  
 „Theology, due to its foundation in divine revelation, cannot be a discipline social work refers to **unless under certain conditions**“ (343, emphasis by KB)  
 Under which conditions, then?

19

Definition Caritas Science – part 3 (KB)

According to the character of the research questions, these activities need **interdisciplinary orientation and cooperation** with other theological or non-theological areas of science and knowledge and different **methods**, respectively.  
 Interdisciplinary work and cooperation as well as the respective use of methods have to be reflected on and accounted for epistemologically.

20

3.

Interdisciplinary orientation  
 as a characteristic trait of  
 Caritas Science

21

Two scholarly arms of Caritas Science

- „Theological arm“ („Church“, „vital realization“, „organization“, „caritas“)
- „Empirical arm“ of social sciences and related disciplines ...
- Interdisciplinary interaction

Vgl. Engelke 2003, 433: „Caritas Science has been founded to promote Caritas academically and to mediate between theology and social work.“  
 „social work“ needs to be completed by „health care“.

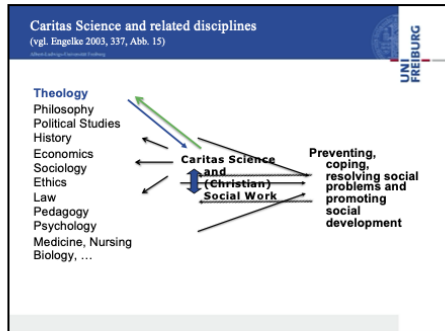
22

Social work and related disciplines with regard to the object of social work (vgl. Engelke 2003, 337, Abb. 15)

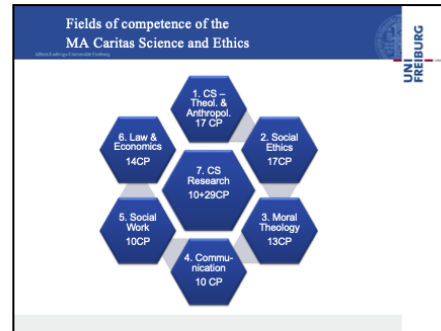
23

Caritas Science and related disciplines

24



25



26

**The necessity and promise of interdisciplinary learning**

Thomas von Aquin, *Summa contra Gentiles* II, 3 abs. 6:  
nam error circa creaturas redundat in falsam de Deo sententiam, et hominum mentes a Deo abducit, – whom faith rather ought to lead to.

For an error about the creatures flows over into a wrong opinion about God and leads the human spirit astray and away from God

Cf. Gaudium et spes 36.59.62

27

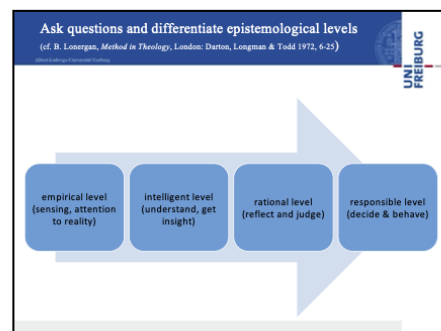
- Caritas Science ...**
- ... intrinsically calls for an interdisciplinary attitude
  - that is ready to learn from other scholarly disciplines and results;
  - that is ready to reflect on one's own presuppositions and ways of thinking and acting;
  - that is ready to reflect on the implications of what new knowledge and insights imply for social work and its object;
  - that does not avoid uncomfortable results of research and challenges by other disciplines;
  - that is able to discern the levels of challenge and discourse;
  - that is able to ask specifically and to focus on relevant questions (and their relevant environment) in order to get the information and results needed from other disciplines.

28

In fact, many difficulties and challenges of interdisciplinary dialogue and transdisciplinary cooperation are pragmatically reduced if the initiators have established well the guiding research questions to be focused on and on which the partners ready to do so can contribute their specific body of knowledge or research.

Otherwise, there can also be bad interdisciplinarity tellingly identified as nice-to-know interdisciplinarity, as-if interdisciplinarity and unfriendly takeover interdisciplinarity (Löfller, 2010).

29



30

4.

Examples of recent and current research projects

31

Recent and current research projects (and publications) of Caritas Science (Freiburg)

[https://www.theol.uni-freiburg.de/disciplin/cas/personen/Baumann/veroeffentlichungen\\_general](https://www.theol.uni-freiburg.de/disciplin/cas/personen/Baumann/veroeffentlichungen_general)

**Lebenssituation jugendlicher Eltern und ihrer Kinder.**  
(2008-2014) Qualitative und quantitative Untersuchungen jugendlicher Mütter, Väter und ihrer Kinder [Stifterverband für die deutsche Wissenschaft (Projekt-Nr. H420 7218 9999 17815)]

**Qualitätsentwicklung für Jugendhilfeeinrichtungen mit katholischem Werlehintergrund (2012-2018)**  
Zum Freiheitsverständnis von im Kontext der Kinder- und Jugendhilfe geschlossen untergebrachten Kindern und Jugendlichen nach § 1631b BGB, angelegt als empirische Grundlagenstudie (incl. Diss-Projekt)

32

Recent and current research projects (and publications) of Caritas Science (Freiburg)

**Religion/ Spiritualität in Psychiatrie und Psychotherapie (2009-2015)** (in Zusammenarbeit mit der Abt. Psychiatrie und Psychotherapie des Universitätsklinikums Freiburg) mit

- **Personalstudie:** Erhebungen bundesweit (incl. Diss.)
- Erhebung bei klinischen **Psychiatrie-Seelsorger/innen** – bundesweit,
- **Patientenstudie (m/w)** – in Uniklinik Freiburg (incl. Diss-Projekt)

**Die Rolle von Religiosität und Spiritualität bei psychiatrischen Patienten (m/w) in Kroatien und Bosnien-Herzegowina** (Untersuchung von Traumafolgestörungen im Vergleich zu anderen psychiatrischen Erkrankungen) (TReSKroBoH) (2014-2018) (incl. Diss-Projekt).

33

Recent and current research projects (and publications) of Caritas Science (Freiburg)

**Interdisziplinäre Forschergruppe (IRG) am FRIAS (2012-2014):** Unterstützung psychosozialer und spiritueller Bedürfnisse und Ressourcen in der Medizin – Chronisch Kranken, Angehörigen und Gesundheitsberufen gerecht(er) werden. [www.nersh.org](http://www.nersh.org)

**Interdisziplinäre Kooperation Seelsorgestudie in Deutschland**  
Kooperation zwischen Prof. Dr. med. Eckhard Frick SJ (Hochschule für Philosophie, München), Prof. Dr. theol. Christoph Jacobs (Theologische Fakultät Paderborn), Prof. Dr. med. Wolfgang Weig (Universität Osnabrück), Prof. Dr. med. Arndt Büssing (Universität Witten-Herdecke), Prof. Dr. theol. Klaus Baumann (Albert-Ludwigs-Universität Freiburg). [www.seelsorgestudie.com](http://www.seelsorgestudie.com)

34

Recent and current research projects (and publications) of Caritas Science (Freiburg)

**Befragung zu Verlust und Trauer seit Beginn der Corona-Pandemie (2021-2022)**

**Einstellungen und Reaktionen von Menschen während der Corona-Pandemie** - eine prospektive Mixed-Methods Befragung an der Albert-Ludwigs-Universität und dem Universitätsklinikum Freiburg. (2020-2022)

Forschungsstelle **"Frieden und Versöhnung"** (2018-2022)

Forschungsstelle **"Alter(n)s-theorien im 21. Jahrhundert"** (2021-2022)

**FRIBIS** - Freiburg Institute for Basic Income Studies: Care and Basic Income Group (2019- ...)

35

Exemplarische Forschungsprojekte der CW (ThD/ PhD dissertations of the last years)

Sylvester Uche Ugwu: Church and civil society in 21st century Africa: potentialities and challenges regarding socio-economic and political development with particular reference to Nigeria, Frankfurt et al.: Peter Lang Edition 2017.

Reiser, Franz: Menschen mehr gerecht werden. Zur Religiosität bzw. Spiritualität von Patientinnen und Patienten in Psychiatrie und Psychotherapie. Würzburg: Echter 2018.

Carrera, Luis: Soziale Marktwirtschaft und Soziale Gerechtigkeit für Lateinamerika: Für eine menschliche Entwicklung heraus aus der Armut. Die Soziale Marktwirtschaft als Instrument der Armutsbekämpfung aus caritaswissenschaftlicher Sicht. Würzburg: Echter 2019

36

Exemplarische Forschungsprojekte der CW (ThD/ PhD dissertations of the last years)

Zeil, Petra: Gemeinsam - sonst ist der Weg zu weit. Die Partnerschaft zwischen der katholischen Kirche in Peru und der Erzdiözese Freiburg. Würzburg: Echter 2019.

Blank, Daniela: Verwurzt in der Caritas. Die Entwicklung der Gemeinschaft katholischer Gemeindefrauentinnen e.V. zwischen 1926 – 2014. Würzburg: Echter 2019.

Maruhukiro, P. Déogratias: Für eine Friedens- und Versöhnungskultur. Sozialpolitische Analyse, ethischer Ansatz und kirchlicher Beitrag zur Förderung einer Friedens- und Versöhnungskultur in Burundi. Berlin, Münster, Wien, Zürich: LIT 2020.

37

Exemplarische Forschungsprojekte der CW (ThD/ PhD dissertations of the last years)

Stark, Kilian: Keine halben Sachen – aufs Ganze gehen! Für ein gelingendes Miteinander von Caritas und Pastoral. Eine Studie zur Vernetzung von Caritas und Pastoral in den neuen Pastoralstrukturen. Würzburg: Echter 2020

Kim, Sungwoo (Isaak): Caritas in säkularen und pluralen Kontexten – Versuch eines Entwurfs für ein Leitbild unter Berücksichtigung der Caritas Deutschlands und Südkorea. Cheongju: Dümok 2020

38

Exemplarische Forschungsprojekte der CW (ThD/ PhD dissertations of the last years)

Kirsch, Christine: "Freiheit ist auch keine Freiheit." Freiheitsaspekte in geschlossenen Einrichtungen der Kinder- und Jugendhilfe (gem. § 1631b BGB). Eine empirische Studie zur Sicht der Kinder und Jugendlichen und der pädagogischen Fachkräfte. Würzburg: Echter 2020

Mahr, Melanie: Reden ist Gold ... – Vom Umgang mit Sexualität bei Jugendlichen. Eine empirisch-qualitative Studie zur Situation der Sexualpädagogik im Kontext katholischer, vollstationärer Einrichtungen der Kinder- und Jugendhilfe. Würzburg: Echter 2020

39

Exemplarische Forschungsprojekte der CW (current projects in final phase)

Alternstheorien und das "gute Altern" – eine kritische Auseinandersetzung im Blick auf Fragen menschengerechten Alterns

Hauskrankenpflege in der Ukraine - eine Pflicht der solidarischen Gesellschaft? Der Beitrag von Caritas International zur Entwicklung einer Hauskrankenpflege in der Ukraine (under review)

Die Rolle von Religiosität und Spiritualität in der Krankheitsbewältigung, insbesondere mit PTBS, nach Kriegserfahrungen (accepted)

Christliche Liebe und buddhistisches Mitgefühl: über die Möglichkeit der Zusammenarbeit auf der caritativen Ebene zwischen der katholischen Kirche und dem Buddhismus in Korea (under review)

40

[www.caritaswissenschaft.uni-freiburg.de](http://www.caritaswissenschaft.uni-freiburg.de)

[www.caritas-science.eu](http://www.caritas-science.eu)

[klaus.baumann@theol.uni-freiburg.de](mailto:klaus.baumann@theol.uni-freiburg.de)

41

Literaturhinweise

Baumann, Klaus (2021) Method and Interdisciplinary, Ethical and Spiritual Aspects in Social Work. *Rainer Gehrig et al. (2021) Spirituality, Ethics, and Social Work* (DOI: 10.6094/978-3-826869-86-4) 2021, 25-34.

Baumann, Klaus (2017) Theologie der Caritas – ein verhältnissvolles offenes Arbeitsfeld. in: Klaus Baumann (Hg.) Theologie der Caritas. Grundlagen und Perspektiven für eine Theologie, die dem Menschen dient. Festschrift aus Anlass des 80. Geburtstages von Heinrich Pompey. Würzburg, 21-26.

Baumann, Klaus (2015) Caritaswissenschaft: ihre Ursprünge und Aktualität, in: Caritas 2016. neue caritas-Jahrbuch des Deutschen Caritasverbandes, Freiburg 2015, 139-145.

Engelke, Ernst (2003) Die Wissenschaft Sozialer Arbeit. Wege und Grundlagen, Freiburg, 2. Aufl. 2004.

Hastinger, Herbert (2004) Was ist Caritaswissenschaft?, in: Theologie und Glaube 84 (2004), 145-164.

Krabbe, Bernhard (1996) Von der Caritas zur Caritaswissenschaft, in: caritas 97 (1996) 550-557.

Mauer, Catherine (2008) Der Caritasverband zwischen Kaiserreich und Weimarer Republik, Freiburg: Lambertus 2008.

Norbert Friedrich/ Klaus Baumann/ Christian Dogheide/ Johannes Eulich/ Astrid Giebel/ Beate Hofmann/ Traugott Jährichen/ Frank Otfried Jürg/ Jörg Kutschnig/ Martin Wolff (Hg.) Diakonie-Lexikon, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 2016.

Pompey, Heinrich (2001) Caritaswissenschaft im Dienst der caritativen Diakonie der Kirche. Was ist Caritaswissenschaft?, in: Theologie und Glaube 91 (2001), 189-223.

Völk, Richard (1976) Fünfzig Jahre Institut für Caritaswissenschaft, in: Caritas 75/76. Jahrbuch des Deutschen Caritasverbandes, Freiburg: DCV 1976, 199-209.

42

**Literaturhinweise**

Benad, Matthias u.a. (Hg.) *Diakoniewissenschaft und Diakonienmanagement an der Kirchlichen Hochschule Wuppertal/Beihil: Interdisziplinarität, Normativität, Theorie-Praxis-Verbindung*. Baden-Baden 2015.

Demmer, Klaus (1999) *Fundamentale Theologie des Ethischen*. Freiburg i.Ue.: Universitätsverlag 1999, 109-112.

Demmer, Klaus (2003) *Angewandte Theologie des Ethischen*. Freiburg i.Ue.: Universitätsverlag 2003.

Evrift, Johannes/Schmidt, Heinz (Hg.) *Diakonik. Grundlagen – Konzeptionen – Diskurse*. Göttingen 2016.

Foré, Bruno (1997) *Theology and Psychology: Resistance, Indifference, Surrender or Integration?*, in: Inoda, Franco (Ed.) *A Journey to Freedom*, Leuven et al.: Peeters 2000, 52-69.

Frey, Christof (1978) *Die Bedeutung der säkularen Wissenschaften für die Ethik*, in: *Handbuch der christlichen Ethik* Bd. 1, 297-316.

Göres, Albert (1986) *Kennt die Psychologie den Menschen? Fragen zwischen Psychotherapie, Anthropologie und Christentum*. München: Piper 1986.

Kötter, Ulrich u.a. (2017) *Diakonie und Öffentliche Theologie*. *Diakoniewissenschaftliche Studien*, Göttingen 2017.

Koelzer, Armin (1993) *Theologie und Naturwissenschaft, Partner oder Gegner?*, in: *Theologie der Gegenwart* 36 (1993) 83-105.

Lorenzen, Bernard (1972) *Method in Theology*. London: Darton, Longman & Todd 1972, 6-25.

Rahner, Karl (1981) *Theologische Perspektiven zum Dialog mit den Naturwissenschaften*, in: *Soziale Praxis* u.a. (Hrsg.) *Christlicher Glaube in moderner Gesellschaft* Bd. 3, Freiburg u.a.: Herder 1981, 34-76.

Thomas von Aquin, *Summa contra Gentiles* II, 3 Abs. 6 (Herausgegeben, übersetzt und mit Anmerkungen versehen von Karl Albert und Paulus Engelhardt, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 2001, 101).

## 第2回

### 人道危機後の赦しと信仰

デオグラシアス・マルフキロ

(カトリック司祭、RAPRED-Girubuntu 代表、ドイツ・フライブルク大学研究員)

アンドリヤナ・グラヴァス

(医師、ドイツ・フライブルク大学研究員)

(2022年3月3日開催)

#### 【デオグラシアス神父】

こんにちは、皆さん。私は今ドイツのフライブルクから皆さんにご挨拶しています。去年の2月に私はグローバル・コンサーン研究所のイベントでお話をさせていただきました。前回は、私が代表を務める団体の平和活動についてお話ししました。今日は私の研究についてお話ししたいと思います。

まず、ブルンジという国についてお話ししたいと思います。ブルンジというのは、東アフリカの中央あたりにあります。そこは過去ドイツの植民地でありました。

そこにはたくさんの内戦がありました。そしてそれはある対立についてのものです。この対立、抗争というものはどういうものなのでしょうか。これは民族的なものなのでしょうか、それとも政治的なものなのでしょうか、それとも両方なのでしょうか。

民族間の対立というものはどのようにして出てきたのでしょうか、そしてその結果というものはどのようなものなのでしょうか。ブルンジでもルワンダの例で知られているようにツチとフツという二つの民族間の対立ということがあります。

ここでは宗主国の影響ということが大切になってきます。植民地時代以前、また植民地の時代には、民族間の戦争や緊張というものはありませんでした。それはいろいろな歴史家によって言われていることです。ブルンジは、ドイツとベルギーという2つの植民地大国によって植民地とされていました。

1885年のベルリン・コンゴ会議でアフリカは分割されてしまいました。そこで言われていたのは、分割して統治せよという原則です。分割統治というものは、1916年の軍事的敗北までブルンジにおけるドイツの植民地統治の原則であったと歴史家は言っています。ベルリン会議の結果、アフリカは、まるでケーキのように、ヨーロッパの国々にわけ与えられたのです。

ドイツの後にベルギーがブルンジを植民地としました。彼らは当初はツチ族のエリートを優遇し、フツ族を犠牲にしていたのですが、ツチ族から独立を要求する人々が出てくると、ツチ族に裏切られたと感じて、フツ族を優遇することにしました。ツチというのは実は少数派で15%です。残りの85%くらいがフツになります。1929年以降ベルギーの植民地支配によって、新行政機構というものが導入されました。フツ族はこの政権から組織的に排除されました。この行政組織では、「知的で生まれながらの支配者」とされるツチが優遇されました。

様々な内戦がありました。1965年、独立から3年後、最初の民族紛争、内戦とされるものが起きました。1972年の出来事はとても残酷で、両サイドが大量虐殺について語っています。

1988年のものはローカルなもので、北部の一部地域のみに影響がありました。1993年には大統領選挙があったのですが、その初めて選ばれた大統領が暗殺された後に、大きな争いがありました。そして、2015年にもまた危機がありました。戦争になるかもしれない、ということで、たくさんの人々が難民として周辺国に逃げることになりました。

私たちの国では、何回も内戦が起こっています。それは悪循環の中で、繰り返されているのです。そして、それを防ぐ手立てはまだ見つかっていません。

多くの内戦は何を人々にもたらしたのでしょうか。ここで簡単に、戦災に遭われた方たちが経験したことについてまとめてみましょう。

まず、トラウマです。多くの人たちがとてもひどい目に遭いました。また、そのような光景を目にした人たちもたくさんいます。例えば、殺された人の手足を見た経験が、子供のトラウマになったりしています。また、人々の持っているものが没収されたり、収用されたりしてしまいました。戦争というものは、将来の希望すらも奪ってしまいました。そして、年齢に関わらず、たくさんの人々が難民となりました。今のウクライナの状態も同じようなものだと思います。次に、「喪の欠落」というものがありました。私たちにとっては、誰かが亡くなったときに、それを記念する、というのがとても大切なのですが、これを実施することができなかったのです。また、誘拐もありました。たくさんの人たちが、政府、警察や軍によって誘拐されました。家族は誘拐された人たちがまだ生きているかも知らずにいます。ちなみに誘拐というのはまだたくさん起きています。そこには不信感というものがあります。ツチとフツとの間でもというものもありますが、同じ村の家族間でもたくさん不信がまだあります。そして、親戚家族を失ったということもあります。ブルンジではそれぞれの人が少なくとも1人は親族を失ったと言われています。

次に、内戦の原因について話しましょう。たくさんの人に話を聞いてきましたが、原因として民族間の対立ということあまり浮かんできませんでした。まず一つ目ですが、劣悪な統治、劣悪な政府というものがあります。また、無法状態ということがあります。つまり、悪いことをした人が罰せられないというようなことです。そして、貧困というとても大切な原因があります。例えば、貧困に悩まされる若者は簡単に反政府的な武装グループの一員となってしまいます。

ブルンジ紛争というのは民族紛争だったのでしょうか。私は、いろいろ調査した結果、民族性というのは実はそんなに重要な要因ではないという風に考えています。それは道具化されて、政治的な目的のために利用されているだけです。

歴史上の様々な内戦がブルンジ社会に大きな亀裂をもたらしています。そして、適切に対処されず、長引いているトラウマたちが、将来の紛争のゆりかごとなっているのです。

質的研究の結果として、解決法を提示することがあるのですが、私の提示する解決法は三つのレベルにわかれています。

一つ目のテーゼは「条件」です。「良い統治・開発」、つまり貧困と闘うこと、そして「正義・法」が大切です。前提条件として、良い統治や民主化、貧困の緩和、そして十分に機能する司法による正義へのコミットメントがなければ、平和と和解に向けたすべての努力は失敗に終わります。

二つ目のテーゼは、私が「社会の治療」と呼ぶものです。さまざまな罪が犯されたため、平和の推進や平和構築には社会の治療が必要なのです。それはプロセスです。まず出会いによって信頼を作る。そして想起。語ることによって、記憶する。そして事後処理です。これは例えば賠償ですとか、記念碑を作るとかそういうようなものです。あと、和解。そして、赦し。

三つ目のテーゼは、持続性です。そこで大切なのは教育する、そして、育てるということです。それは新たな意識を構築することです。教育を通じて文化的な変化を生み出すことで、平和と和解の文化を持続的に促進することができます。

これは別の研究なのですが、2015年に内戦になりそうになったとき、たくさんの人々が亡命し、難民となりました。私は、その人たちのところに赴き、お話をお聞きしました。

たくさんの方たちは、誘拐されたりですとか、拷問にあたりたりですとか、性暴力を受けたりですとか、ひどい経験をされています。そこで、そのような人たちに、信仰の役割というものについて質問をしてみました。

まず、こういうふうに答える人たちがいました。「私は神の加護というものを経験した。」「神は、私のために計画がある。」「聖書は身を守ってくれる。」「神は私のことを救い、守ってくれた」。ここには、摂理という概念が大切です。やはり、神は私のために計画があるのだ、という考えが中心となっています。

また、ブルンジはキリスト教徒が多い国なのですが、65%がカトリックです。すると、やはり「何か私たちの信仰というのは表面的なものであるのではないか」、「本当に信じているのだったら、内戦のようなものは起きないはずではないか」、というような言葉も聞きました。

「神が守ってくれた」という人のように、「私の信仰が強められた」というようなことを言う人もいます。そして、「どうしてこのようなことが起きるのか」という疑問を持つ人は、「私の信仰は試されていた」というように言っています。しかし、信仰が弱まった、と言った、ツチの少女もいました。ツチの少女たちは警察官等による性暴力を受けたりしていました。

また、信仰というのは問題を乗り越えるための力であると主張する人もいました。希望を強調している人たちもいました。信仰によって希望が芽生えた、などと言っていました。

次に、赦しについてです。人々はどのようなことを言っているのでしょうか。まず、私はすでに赦せる、と考えている人がいます。「まず正義がなされてから」「加害者が罰せられてから」と言う人たちもいます。また、「赦せないし、赦すことは無理であるし、赦したくない」と言う人たちもいます。「私には赦すのは無理。なぜなら私の子どもが殺されたから。私は赦すことができない。」そういう風に言う人たちがいるのです。また、赦されるために赦さなければ、という風に考える人たちもいます。暴力の悪循環から逃れるために、赦しが必要だと言う人たちもいます。また、一般市民の加害者は赦すことができるとしても、上の方で全てを操った人たち、例えば政治家などは絶対赦せない、と言う人たちもいます。

私の研究は、ブルンジ、アフリカだけに関係のあることではありません。例えば今こヨーロッパで、ウクライナで起こっていることにも関係があるのだと、私は信じています。

#### 【参加者】

異なる価値観や世界観がある中で、一致して、一つの方向に動いていくには、どうすればよ



いのでしょうか。

【デオグラシアス神父】

多様な社会では、当然、みんなである一つの方向に動いていくというのは、簡単なことではありません。ただ、少なくともそれぞれの個人が何らかの方向性というものを持っていることが大切です。そして大切なことをみんなが考えて、それに集中していくことです。いろいろな考え方のグループがあります。例えば、カトリック、それから仏教、イスラムですとか、いろいろあるのですが、それぞれの人たちが自分たちの方向性をきちんと持っている状態であれば、何らかの形で一緒の方向性も見つけていけると私は信じています。

【参加者からのコメント】

過去の痛みと、求めている癒しに違いがある中で、どう本当の癒しを求めていくのでしょうか。

【デオグラシアス神父の回答】

これは後にアンドリヤナ・グラヴァスさんがお話されることに関係あるので、そちらを聞いていただきたいのですが、私が思うに、痛みと過去の痛み、過去というものは、意識の中にもあります。潜在意識の中に残っています。そしてそれは世代さえも超えていくものです。世代を超えて伝わってしまうものです。例えば、第二次大戦の痛みは、ずっとドイツで続いています。それにどうやって対処すればいいのか。

大切になってくるのは、やはり真実だと思います。「何が起きたのか」を発見することです。歴史をきちんと理解することです。真実と和解ということがアフリカで言われてきました。過去の問題を適切に真実に基づいて処理するということが大切です。それは社会の治療でもあります。トラウマを受けた人には、PTSD等の精神疾患になってしまった人たちも、もちろんいます。そのような人たちは、医学的、または、心理的な治療を必要としていると私は考えます。

今ロシアで起きていることでもそうですが、ロシアには、一部の人だとは思いますが、ロシアは「平和のための戦争」、「使命としての戦争」を戦っていると言っている人たちもいます。ロシアの人たちはそういう風に考えているのかもしれませんが、しかし、ウクライナの人たちは、これは自衛のための、自分たちの存在を守るための戦争だという風に考えています。やはり、歴史観はとても大切なのです。

【参加者】

今のお話を聞いて思い出したのが、プーチン大統領が、過去のトラウマというものを理由に、つまり、ソビエトが瓦解した時のトラウマ、そして、その後の国家としての失策の連続のトラウマというものによって、今、戦争を起こしているという説です。

【デオグラシアス神父】

社会の治療というものがやはり戦争を防ぐには大切ではないのでしょうか。

## 【グラヴァス医師】

私はフライブルク大学神学部のカリタス学研究所に勤めています。クロアチア出身です。医師として、また、戦争を実際に経験した人間、そして、カリタス学を学ぶ人間として、皆さんと今日はお話したいと思います。

クロアチアという国は中央ヨーロッパにあります。首都はザグレブです。とても美しい国です。千を超える島々と八つの国立公園、そして、11の自然公園があります。私の国の美しい場所を皆さんにお見せしたいです。是非クロアチアを訪れてみてください。しかし、この国が過去何十年にわたって破壊されてきたということも忘れないでください。

この地域では過去に5年間にわたる戦争がありました。1万5000人ほどが死にました。そのうち273人は子どもでした。1800人以上の人たちはまだ行方不明です。それは家族にとってとても重い負担となっています。なぜならお別れができなかったからです。また、125を数える集団墓地が見つっていますが、他にも見つかっていないものもあるでしょう。ボスニア等からの難民もたくさんいます。クロアチアでは今でも100万人が戦災にあったせいで通常の生活を送れないでいます。

戦争はたくさんのもを生み出しましたが、PTSDもその一つです。PTSDには複数の併存疾患もあります。鬱、自殺、薬物中毒などです。クロアチアの退役軍人の間での自殺率は、その他の人たちと比べて、とても高いです。退役軍人の罹病率はとても高いです。世界中で、一般に、死因の一位は心臓血管疾患で、二位が癌なのですが、興味深いことに、退役軍人の間ではそれは逆になっています。つまり、死因の一位が癌で、二位が心臓血管疾患なのです。退役軍人の平均寿命は62歳です。

退役軍人は他にもたくさんの心理的、社会的な問題を抱えています。一例ですが、退役軍人は政府からさまざまな支援を受けているのですが、もう戦争は何年も前に終わったのにどうしてまだ支援が続いているか、というような批判があります。そこにはスティグマがあるのです。

退役軍人の間で最も多い精神的疾患はPTSDです。これはとても重い病気で、慢性的になりがちです。患者は、過去に起こった出来事を経験し続けます。そして、不安が続きます。例えば、雨降りの音が聞こえると、戦場に引き戻されてしまいます。匂いですとか、味ですとか、見たものなどが、トリガーとなるのです。

クロアチア全体でPTSDの有病率は30%にもなります。PTSDというのは、時間とともに慢性化してしまいます。デオグラシアス神父もすでに話しましたが、二次的なPTSDもあります。トラウマになる経験をした人の身近な人たちがPTSDになってしまうのです。夫の経験で妻が、父親の経験で子供が、PTSDになるのです。そして、妻は鬱になり、子どもは学校に行かず、引きこもる、というようなことがあります。第二次世界大戦の時にも同様のケースが多くありました。「戦争の子ども」とか「戦争の孫」というような言い方があります。

私の博士論文のタイトルは、『私はまだそこにいる～クロアチアのトラウマ患者における宗教性と霊性の役割～』です。

この写真を見てください。これは銃で撃たれたキリストです。ヴコヴァルというクロアチアの街のものです。この街は3ヶ月間軍隊に包囲されて攻撃にあい、たくさんの人たちが亡くなりました。

私はどうして「私はまだそこにいる」というタイトルを付けたのでしょうか。それはこの病気に悩まされている人たちがクロアチアにまだたくさんいるからです。祖国への愛、故郷への愛、自由。これらが、戦時下のクロアチアでは生き残るための動機付け、理由でした。そして、慰めと希望を信仰に求めました。つまり、神はまたそこにいたのです…。

次に、問いの設定です。宗教性と霊性（スピリチュアリティ）は、主観的な立場から見て、PTSD 患者がトラウマに対処する際に、どのような役割を果たすのでしょうか。PTSD 患者は自分の人生についてどう思っているのでしょうか。宗教性や霊性は、PTSD 患者が赦しの準備をする際に、どのような役割を果たすのでしょうか。

これらの問いに関して、私は、クロアチアの二つのクリニックで、量的調査を実施しました。1200 のアンケート調査に対する回答が返ってきました。その中から 400 を見ました。調査の対象は ICD（国際疾病分類）で F の 43-1（外傷後ストレス障害）と F 62-0（破局体験後の持続的人格変化）の診断がついた患者です。

測定には、SpREUK（Erfassung der Spirituellen und Religiösen Einstellung und des Umgangs mit Krankheit；病に対する霊的及び宗教的な適応と態度に関する調査）を用いました。霊性と宗教性に関して測定するためのものです。また、統計処理には SPSS というソフトウェアを用いました。

結果についてお話しします。回答率は 85.7%でした。サンプルの 76%が男性で、88.7%がカトリックでした。このカトリックの割合は、クロアチア全体のものと同じくらいです。戦争は 5 年間続き、53.7%が全期間兵士として活動していました。興味深いことに、過去 20 年以上治療を受けている患者が 22.4%、そして、ほぼ同数の 22.2%の患者が過去 5 年以内に治療を始めています。彼らは新しく治療を受けている人たちです。88.2%の患者が、いまだに、心理的そして身体的に、苦しみを受けていると言っています。そして、87%ほどの患者が、戦争に参加したこと、戦争での経験が自分たちの病気の原因だと言っています。

患者は、「あなたは宗教的ですか。あなたはスピリチュアルな人ですか。」という質問については、自己評価で答えているのですが、45.9%の人たちが、自分は宗教的かつスピリチュアルである、と答えています。宗教や霊性は、意味の探究、赦し、病気にどのように向き合うか等、さまざまなことに、どう影響しているのでしょうか。

トラウマ患者は、意味を探る傾向にあります。意味と希望、そして、掴まっていられるもの、支えとなる何かを探します。多くの研究によれば、人生に意味を見つける人は、この病気、PTSD によりよく対処することができます。私たちの結果も同様でした。

一つ目のモジュールは、意味の探求についてです。63.9%の患者が、人生において意味を探ることそして PTSD に意味を見出すことが大切だと答えています。74%が、今までの自分の人生が意味あるもの、価値あるものであったと希望しています。そして、73.7%が、PTSD に意味がある、また、この病気による制約に意味があると考えています。しかし、より強い PTSD に苦しんでいる人は、PTSD に意味を見つけることに困難を感じています。

このような状況は、信仰における問題にも通じています。どうして神はこのようなことを許したのだろうか、と考えるからです。よって、PTSD 患者の治療には、宗教的なもの、霊的なものを、セラピーの中に取り入れることが大切です。

二つ目のモジュールは、人生の満足度についてです。36.8%の患者が、自分の人生に満足していません。自分の人生はひどいものだ、自分は不幸だ、と思っています。長い治療がうまくいっていない場合、特に、人生に対する満足度が下がる傾向があります。しかし、宗教的または霊的な人たちの半数以上は、宗教性と霊性のおかげで人生の満足度が高くなっている、と答えています。そして、宗教的でない、霊的でもない、と答えた人たちは、人生に対する満足度がかなり低いです。

三つ目のモジュールは、病気とどう向き合うか、ということについてです。神や天使などの宗教的な存在を信じている人たちは、より良いスコアが出ています。5年間ずっと戦争に従事していた人たちの間では、より多くの人たちが宗教的または霊的な支えを探しています。そして、半数以上の人たちが、宗教や霊性が日常的に力を与えてくれると言っています。

四つ目のモジュールは、宗教的・霊的なニーズについてです。80.8%の患者たちが、内的な平和への強い欲求があると言います。トラウマというのは、その人全体を揺さぶるものです。内的な揺れを大きく感じているため、当然、平和を求めるのです。また、約64%が、自ら祈る欲求を感じています。そして、約50%が、他の人に祈ってもらうことを望んでいます。

五つ目のモジュールは赦しについてです。赦しへの欲求はどれほどなのでしょう。

赦しへの欲求には、赦されることへの欲求と赦すことへの欲求があります。赦しというのは、長期間にわたるプロセスです。それは、今日明日に起こるものではなくて、熟さなければならぬものです。クロアチアでは、27年が過ぎましたが、赦しのプロセスで完了したものはありません。75%の人たちが、条件付きの赦しはあり得ると言っています。条件とは、きちんと賠償がなされるということです。8%は無条件で赦せると言っています。そして、6%は復讐を考えています。

赦しは和解に必須です。しかし、赦しは直ちに和解につながるわけでもありません。和解には、双方の準備が必要だからです。正義は、和解にとって一番大切な条件です。多くの研究によると、赦しは、心理的な健康にとって非常に重要です。赦し、和解、そして正義というものは、持続的な平和に大切なものです。

私の研究によると、72%が、誰かを赦せるようになりたい、という欲求を感じています。しかし、退役軍人の間では、赦すこと、許されることへの欲求はより少なくなっています。それはパラドックスのようにも思えます。なぜなら、ほとんどの退役軍人は宗教的で霊的だからです。彼らは自問しました。どうして戦争が起きてしまったのだろうか。そして、次のように答えたのです。「我々は自衛のための戦争をしたのだ。」「我々は、子どもや妻、女性や家のために戦ったのだ」。このような動機、理由で戦ったので、赦しの必要性を感じられないのです。なぜなら戦争に参加したこと自体には罪悪感がないからです。しかし、クロアチアの退役軍人は、例えば、仲間が死んでしまったことには、罪悪感を感じています。そういう場合には、なんで私は生きているのだろうと、感じたりしています。

クロアチアの人たちにとって、カトリック教会は、赦しのプロセスの中で最も大切なものです。ユニバーサルでヒューマニスティックな教会には、正義や赦しや愛があるので、赦しのプロセスに大きな力を与えることができます。

今まで、宗教性・霊性とトラウマの関係は、あまり研究されていませんでした。このテーマ

について、宗教性とトラウマとの関連についての研究はまだクロアチアでなされていません。しかし、私の研究は、クロアチアのトラウマ患者において霊性が重要な役割を果たしていることを示しています。この知見によって、学際的な、または宗教間にわたるコミュニケーションやディスカッションというものが、様々なアクターの間でなされるようになることを望みます。そして、和解と平和のプロセスの促進に貢献できればいいと思います。

私が話したトラウマ患者の多くは、宗教や霊性が PTSD の治療においてもっと役割を果たすべきだと感じています。だから、クロアチアのカトリック教会は、もっと頑張らなければいけません。責任ある立場にいる人たちが、この研究の結果によって、意識を変えることを望みます。他にも医療機関等、様々なアクターに私の研究結果を伝えていきたいです。かれらはこのテーマについてもっと考える必要があると思います。

今後の展望です。宗教性と霊性は、心理療法においてはこれまでほとんど役割を与えられていませんでした。警察官や救急隊員等についても研究されるべきでしょう。そして、各種団体等で教育の機会が与えられるべきでしょう。また、会議やワークショップ等も実施すべきでしょう。

最近、ベルリンで、ヨーロッパ最大の精神医療学会に出席しました。また、クロアチアでもいろいろところで講演をしています。私の目標は、PTSD 患者が、より全人的な治療を受けられるようにすることです。

恐ろしいことに、ロシア＝ウクライナ戦争の続く欧州ではこのテーマはとてもアクチュアルです。そこで、特に宗教的な側面の強い社会では、教会がもっと役割を担うべきだと思います。宗教的な人は、慰めや希望や力を、信仰に頼っているからです。酷い経験や、それによる PTSD にどうやって向き合うか。そこでは、信仰が重要なのです。

#### 【参加者】

退役軍人は、祖国のために、また、自分の家族等を守るために戦った、という意識が強いので、罪責感がないため、宗教的な慰めも赦しも必要がないと思っている人が多いというお話がありました。同じことは日本の戦争についても言えます。今回のロシアとウクライナの件でもそうだと思うのですが、祖国を守るために戦ったんだ、と正当化する人たちは必ずいます。でも、人を何人も殺してしまうと、いくら正義の戦争と思っている、傷ついてしまうと思います。そういう人たちのセラピー、平和プロセスはどうなるのでしょうか。

#### 【グラヴァス医師】

赦しというのはとても長いプロセスで、色々なことが必要となります。そして、赦しは、心からのものである必要があります。単に言葉だけでできるものではないのです。無理強いするようなものではないのです。そして、どれほどの時間が癒しに必要なかは、人によるでしょう。私も、ウクライナのことを聞くと、私は PTSD の診断はついていませんが、戦争のことを思い出します。

【参加者】

赦すことの欲求とか、赦されることの欲求ということについてお話しいただきましたが、赦しのプロセスには長い時間がかかります。そして、宗教、教会というものは、赦す心を成熟させる助けになる、ともお話しされました。そこで質問なのですが、人間には「赦したい」という基本的な欲求はあるのでしょうか。

【グラヴァス医師】

私は、それはあると思います。人間は、信仰に関係なく、赦すことを必要としています。それは人間の根底にあるものだと思います。なぜなら、人間は社会的であって、お互いを必要としているからです。しかし、全てのトラウマは同じではありません。例えば、子どもを亡くしてしまうということもあるでしょうし、怪我をするということもあるでしょう。しかし、みんな赦しを必要としているということは、信仰に関わらず同じなのではないでしょうか。赦せない、赦すことができないというのは、自分を傷つけるものだと思います。その感情は、重荷として自分の心の中に残ってしまいます。

【参加者（つづき）】

赦したい気持ちがあること、赦せないと自分を傷つけてしまうことはよくわかります。しかし、時として、それが自分を傷つけていながらも、赦さないことで自分を満足させるケースも、一般的とは言えないかもしれませんが、あるのではないのでしょうか。人は基本的に赦したいという気持ちがあると先生はおっしゃっていましたが、「赦さない」ということは心の病と言えるのでしょうか。そして、そこで宗教が大きな力を発揮するのかもしれませんが、病院ではなく。自分が自分を傷つけてしまっていることに気づかせるのは、宗教や霊性の役割なのかもしれません。

【グラヴァス医師】

赦さないことが、復讐となる場合があります。それは、赦されないことは相手にとって悪いことだからです。それがきっと赦さないことの満足感に繋がっているのでしょうか。しかし、赦さないことは、重荷にもなります。赦すということは赦す人にとって大切なのです。

【参加者】

お二人のご講演では、赦しは正義が実現されることが前提であると仰っていました。ただ、赦しというのは非常にキリスト教的な概念だと思います。日本の社会で生きてると、キリスト教の言うような「赦し」の概念はないように思えます。例えば、儒教的な日本や韓国での#MeToo運動を見ていると、赦しという概念はないように思えます。こういうキリスト教社会ではないところで、赦しと正義のバランスをどのようにとったらいいのでしょうか。

【グラヴァス医師】

私の研究は量的なものだったのですが、アンケート調査の回答によく補完的な説明として書

かれていたのが、「私は性暴力の被害に遭った」ということでした。クロアチアではこのようなケースはとても多くありました。クロアチアやボスニアの戦争では、そのような行為が、武器として使われていたのです。そして、それは組織だっで行われていたもので、父親の前ですとか、夫の前で行われたものなのです。すると、副次的なトラウマも生じてきます。

また、このようなことが、妊娠させることを目的としてもされてきました。すると、子どもが実際に産まれた後に、その子を自分の子どもとして愛するべきなのか、それとも加害者の子どもなので愛するべきではないのか、というようなことを考えるわけです。そして、いつか、子どもは大きくなって、自分の出自について知ります。しかも、ちゃんと自分の身を守らなかったとか、また、そういうふうにさせてしまったのではないかと、周囲の人々に苛まれることもあるのです。

例えば、ヴコヴァルという都市では、性的暴行の被害に遭った人が、加害者に街で出くわすということがよくあります。なぜなら正義というものがなされなかったからです。そのような女性たちはどのような気持ちでしょうか。加害者は自分のことをあざけているかもしれない、等と考えるのです。

クロアチアでは全ての加害者が罰せられたわけではありません。クロアチアというのは狭い国なので、お互いのことを知っています。そこで正義がなされないかぎり、和解、平和、赦しもないのです。被害者は、加害者が罰せられてからだったら、自分も赦せると感じるのです。そうなれば良いと私も思っています。

#### 【参加者】

キリスト教徒にとっては、例えば最後の審判ですとか、究極的には必ず正義がなされることになっています。また、イエスもそうだったのかもしれませんが、謝罪がなされる前、正義がなされる前に、赦そう、と思う人もいます。

#### 【デオグラシアス神父】

もちろん、キリスト教徒の場合には、最後の審判があります。そのような考え方は、特に、今回のウクライナのプーチンの場合のように、とても高い地位にいて、罰することができないような人について考えるときに、役立つかもしれません。もちろん、これは神学的にもとても大切なテーマです。でも、罰することができるのであれば、やはり罰することが必要でしょう。大切なことは、赦すという行為が強制されないことです。赦しは、自発的に行われるべきことであって、誰かに赦すことを強えられることはよくないことですし、それは不可能です。

#### 【参加者】

日本と朝鮮半島の問題はまだ解決されていません。今も日本ではたくさんのヘイトスピーチがあります。また、高校の無償化は朝鮮語を学ぶ子どもたちには適用されていないとか、そのようなこともあります。和解には程遠い状況にあるわけです。

今、市民と宗教者が、和解と平和のプラットフォームを立ち上げることを始めています。そこで今回のお話が参考になると思いました。出会いというのは、市民間で、あるいは、宗教者

間でなされていますが、私が難しいと感じているのは、真実の共有です。それができていないのです。かたくなに片方が、日本が、拒んでいるのです。だから、まだ教育までにはとても届かない。真実を共有するにはどうすればいいか、何かヒントをいただければと思います。

**【グラヴァス医師】**

私は、この件に関しては、とても大切なのは、一般化しないということだと思います。例えば、日本人が悪いとか、そういうようなことではなくて、やはり何事も個人が個人を見つめることが大切なのではないのでしょうか。そこで、共通の目的を見つけることも大切になります。しかし、和解というのは大変長いプロセスです。クロアチアとセルビアもまだ和解していません。繰り返しになりますが、大切なのは個人です。ナチス政権下のドイツにさえも戦争に反対した人もいたわけですから。あまり集団的に考えずに、それぞれの人を見るのが、私は大切だと思います。



【配布資料】

**Für eine Friedens- und Versöhnungskultur**

Sozial-politische Analyse, ethischer Ansatz und kirchlicher Beitrag zur Förderung einer Friedens- und Versöhnungskultur in Burundi

Webinar: Caritas und Gesellschaft  
Institut of Global Concern, Sophia University, Tokyo-Japan

P. Déogratias Maruhukiro, PhD / Universität Freiburg

Albert-Ludwigs-Universität Freiburg

UNI  
FREIBURG

1

**Den burundischen Konflikt verstehen**

- Welcher Art ist der Konflikt in Burundi?
- Handelt es sich um einen ethnischen oder politischen Konflikt oder um beides?
- Wie haben sich die ethnischen Spannungen entwickelt und was sind die Folgen?

UNI  
FREIBURG

2

**ブルンジ紛争を理解する**

- ブルンジの紛争はどのようなものですか？
- 民族紛争なのか政治紛争なのか、あるいはその両方なのか。
- 民族間の緊張はどのように生まれ、どのような結果になったのか。

UNI  
FREIBURG

3

**Der Mwami und die Einheit zwischen Hutu und Tutsi**

Keine ethnische Kriege oder Spannungen vor der Kolonialzeit (Rutamucero, D. 2007; Bukuru, Z. 2004; Nsanze, A. 2003; Nimenya, E. 2012)

*“Es ist kein Krieg zwischen den Ethnien vor oder während der Kolonisation bekannt. Weder in der Geschichte, noch in Legenden oder anderen Erzählungen, noch in Liedern wird berichtet, dass es je einen bewaffnet Konflikt zwischen den Ethnien gegeben hat“.*  
(Nimenya 2012)

UNI  
FREIBURG

4

**ムワミとツツ族・ツチ族間の団結**

植民地時代以前に民族間の戦争や緊張はない (Rutamucero, D. 2007; Bukuru, Z. 2004; Nsanze, A. 2003; Nimenya, E. 2012)。

「植民地化以前も、植民地化時代も、民族間の戦争は知られていない。歴史にも、伝説などの物語にも、歌にも、民族間の武力衝突があったとは伝えられていない。」  
(ニメニア2012)

UNI  
FREIBURG

5

**Die Kolonialzeit und die Spaltung zwischen Hutu und Tutsi vor der Unabhängigkeit**

- zwei Kolonialmächte: Deutschland und Belgien
- Berlin Konferenz bzw. Kongokonferenz in 1885: Afrika wurde unter verschiedene Mächte geteilt.
- Das Prinzip „*Divide et impera* (Teile und herrsche)
- „**Teile und herrsche** „wurde bis zur militärischen Niederlage 1916 zur Maxime deutscher Kolonialverwaltung in Burundi“ (Strizek, H. *Geschenkte Kolonien, Rwanda und Burundi unter deutscher Herrschaft, Ch. Links Verlag, Berlin 2006*)

UNI  
FREIBURG

6

### 植民地時代と独立前のフツ族とツチ族の分断

- ドイツとベルギーという2つの植民地大国。
- 1885年のベルリン会議またはコンゴ会議：アフリカは異なる勢力に分割された。
- divide et impera" (分割して統治する)の原則
- 「分割統治は1916年の軍事的敗北までブルンジにおけるドイツの植民地統治の原則であった」(Strizek, H. Geschenkte Kolonien, Rwanda und Burundi unter deutscher Herrschaft, Ch. Links Verlag, Berlin 2006)。

7

### „Divide et Impera“ bei Kongokonferenz Berlin 1885

8

### „コンゴ会議「Divide et Impera」ベルリン 1885年

9

### Spannung zwischen Hutu und Tutsi in Kolonialzeit

Die belgische Kolonialverwaltung begünstigte zuerst die Tutsi-Elite auf Kosten der Hutu, aber als die Zeit kam, die Unabhängigkeit zu fordern, fühlte es sich von den Tutsi verraten und beschloss, die Hutu zu fördern. (Wola Bangala 2009)

Seit 1929 hat die belgische Kolonialmacht eine Neue Verwaltungsorganisation des Landes eingeführt. Alle Hutu wurden systematisch aus dieser Verwaltung entfernt. Die Tutsi, die als intelligent und „geboren zum Herrschen“ angesehen wurden, waren in dieser neuen Verwaltungsorganisation bevorzugt. (Buyoya 2001)

10

### 植民地時代におけるフツ族とツチ族の緊張関係

ベルギー植民地政権は、当初ツチ族のエリートを優遇し、フツ族を犠牲にしていたが、独立を要求する時期になると、ツチ族に裏切られたと感じ、フツ族を優遇することにしたのである。(Wola Bangala 2009)

1929年以降、ベルギーの植民地支配により、「新行政機構」が導入された。すべてのフツ族は、この政権から組織的に排除された。この新しい行政組織では、知的で「生まれながらの支配者」とされるツチ族が優遇された。(ブヨヤ 2001)

11

### Verschiedene Bürgerkriege

- ◆1965 drei Jahre nach der Unabhängigkeit, gilt als erster (ethnischer) Konflikt Bzw. Bürgerkrieg
- ◆1972 : Grausam ( von beide Seite wird von Genozid gesprochen )
- ◆1988: betrifft nur ein Teil des Landes im Norden
- ◆1993: Nach der Ermordung des ersten gewählte Präsidenten

12

### 様々な内戦

- ◆ 独立から3年後の1965年が最初の(民族)紛争、内戦とされている。
- ◆ 1972：残酷(両者とも大量虐殺を語る)
- ◆ 1988年：北部の一部地域のみ影響あり
- ◆ 1993年 初当選した大統領が暗殺された後。

13

### Kurze Darstellung der Ergebnisse: Betroffenheit

14

### 結果を簡単に説明する。愛着度

- ◆ 戦争のトラウマ
- ◆ 没用
- ◆ 絶望的な状況
- ◆ 難民としての生活
- ◆ 喪服の欠落
- ◆ アブダクション
- ◆ 不信感
- ◆ 親族の喪失

15

### Ursachen des Konfliktes

16

### Ursachen des Konfliktes

Ist der burundische Konflikt ein ethnischer Konflikt?

- ◆ Ethnizität in Burundi ist **keine** Ursache des Konfliktes. Sie wird instrumentalisiert und für politische Zwecke genutzt.
- ◆ Die verschiedene Bürgerkriege im Laufe der Geschichte haben zu einem großen Riss im burundischen Gesellschaft geführt, so dass das erlittene und nicht bearbeitete Trauma langfristig zur Wiege zukünftiger Konflikte wird.
- ◆ Es gibt noch drei Hauptfaktoren: Die Frage des Unrechts, der schlechten Regierungsführung und der Armut

17

### 紛争の原因

ブルンジ紛争は民族紛争なのか？

ブルンジの民族性は、紛争の原因ではない。それは道具化され、政治的な目的のために利用される。

歴史上のさまざまな内戦は、ブルンジ社会に大きな亀裂をもたらし、受けたトラウマに対処できないまま、長期的には将来の紛争の揺りかごになってしまうのです。

やはり、不正の問題、悪政の問題、貧困の問題の3つが大きな要因です

18



19

**3 Thesen**

**1. Voraussetzungen:**

„Ohne gute Regierungsführung bzw. Demokratisierung; ohne die Armutsbekämpfung und ohne Einsatz für Gerechtigkeit durch eine gut funktionierende Justiz sind alle Bemühungen um Frieden und Versöhnung zum Scheitern verurteilt.“

20

**3 テッセン**

**1. 前提条件**

「良い統治や民主化、貧困の緩和、そして十分に機能する司法による正義へのコミットメントがなければ、平和と和解に向けたすべての努力は失敗に終わります」。

21

**3 Thesen**

**2. Therapie der Gesellschaft**

„Aufgrund der verschiedenen Verletzungen und begangenen Verbrechen benötigt die Förderung des Friedens bzw. die Friedensbildung eine Therapie der Gesellschaft. Diese Therapie besteht aus einem Vorgang mit verschiedenen Etappen: Begegnung; Erinnerung; Aufarbeitung bzw. Traumabewältigung...“

22

**3 Thesen**

**2. 社会の治療**

“さまざまな違反や犯罪が行われているため、平和の推進や平和構築には、社会の治療が必要です。この療法は、さまざまな段階のプロセスで構成されています。出会い; 想起; ト라우マとの折り合いをつける、克服する...”。

23

**3 Thesen**

**3. Nachhaltigkeit**

„Durch Erziehung bzw. Bildung kann ein Kulturwandel geschaffen werden und nachhaltig eine Kultur des Friedens und der Versöhnung gefördert werden.“

24

### 3 Thesen

#### 3. サステナビリティ

"教育を通じて、文化的な変化を生み出し、平和と和解の文化を持続的に促進することができる。"

13.03.22 © UNIFREIBURG

25

### Excursus: Rolle des Glaubens

Providence / Schicksal  
 Providence / Vorsehung  
 Foi superficielle (Charade) / Oberflächlich (Charade)  
 Serfiter / Stark geworden  
 Foi mis à l'épreuve / Glaube auf der Probe  
 Foi affaiblie / Glaube geschwächt  
 Renoncer à la violence / Verzicht auf Rache  
 Force de vaincre les problèmes / Kraft die Probleme zu überwinden  
 vivelle l'expérience / weckt die Hoffnung  
 Rend possible le Pardon / ermöglicht die Vergebung

13.03.22 © UNIFREIBURG

26

### Rolle des Glaubens / 信仰の役割

Rolle des Glaubens:  
 Die letzte Recherche, die ich mit burundischen Flüchtlingen gemacht habe, die vor dem Krieg in Burundi geflohen sind. Die Frage nach der Rolle des Glaubens stand dabei im Mittelpunkt.

Hier ist, was die Flüchtlinge sagen:  
 1. Der Glaube ist für mich ein Schutz. Ich habe die schützende Hand Gottes wirklich erfahren.  
 2. Der Glaube ist Vorsehung, das heißt, Gott hat einen guten Plan für mich, deshalb hat er mich am Leben erhalten.

信仰の役割  
 前回、ブルンジの戦争から逃れてきたブルンジ難民の方々と一緒に調査した時のことです。信仰の役割を問うことが中心でした。  
 以下は、難民の声である。  
 1. 信仰は自分を守るものである。本当に神の守護の手を実感しています  
 2. 信仰は摂理である。つまり、神は私に良い計画を持っている。だから私を生かしたのだ。

13.03.22 © UNIFREIBURG

27

### Rolle des Glaubens / 信仰の役割

- Die Schwierigkeiten haben meinen Glauben gestärkt.
- Mein Glaube an Gott wurde auf die Probe gestellt: Warum ist uns das passiert?
- Mein Glaube wurde ziemlich geschwächt...
- Der Glaube hilft mir, auf Rache zu verzichten.
- Der Glaube war für mich eine Kraft, um Probleme zu überwinden
- Der Glaube hat in mir die Hoffnung geweckt
- Der Glaube hilft mir zu vergeben

- 困難が私の信仰を強めた。
- 私の神への信仰が試された。なぜ、私たちにこんなことが起こったのでしょうか。
- 私の信仰はかなり弱まっている...
- 信仰は復讐を放棄するのに役立つ。
- 信仰は問題を克服するための力になっている
- 信仰が私の中に希望を呼び覚ました
- 信仰は許すことを助けてくれる

13.03.22 © UNIFREIBURG

28

### Excursus: Vergebung

Pardon / Vergebung

Pri pour pardonner / Heist für die Vergebung  
 Juste d'être prêt le pardon / Zu sein Justiz / dann Vergebung  
 Les autres de crimes doivent demander Pardon / Täter müssen um Vergebung bitten  
 Pas de pardon / Keine Vergebung


Pardonne pour être pardonné / Vergeben um vergeben zu werden  
 Sortir de cercle vicieux de la violence / Aus dem Teufelskreis der Gewalt zu kommen  
 Possible pour les simples gens / Möglich für einfache Menschen

Il me sera très difficile / Nicht einfach für mich

13.03.22 © UNIFREIBURG

29

### Danke für ihre Aufmerksamkeit



13.03.22 © UNIFREIBURG

30

**Traumafolgen des Krieges in Kroatien**

*Die Rolle von Religiosität und Spiritualität bei traumatisierten Patient:innen in Kroatien*

Webinar: Caritas und Gesellschaft  
 Institut of Global Concern, Sophia University, Tokyo-Japan

Dr. med. *Andrijana Glavas Ph.D.*

Albert-Ludwigs-Universität Freiburg



1

**Kurze Vorstellung**

Caritaswissenschaft: Ein Spezifikum der Theologischen Fakultät in der Albert-Ludwigs-Universität Freiburg



UNI FREIBURG

2

**Kroatien**



Mitteleuropa



Hauptstadt: Zagreb  
 Fläche: 56.594 km<sup>2</sup>  
 Einwohner: 3.888.529  
 86% katholisch  
 Seit 2013 in EU

über 1.000 Inseln  
 acht Nationalparks und elf Naturparks





3



4

**Der Krieg in Kroatien (1991-1995) und seine Folgen**


14.752 Tote/ 273 Kinder  
 1.852 Personen werden vermisst  
 125 Massengräber  
 800.000 Vertriebene  
 ca. 1 Million Personen in Kroatien durch den Krieg so betroffen dass sie kein normales Leben mehr führen können

5

**Trauma und andere Folgen des Krieges**

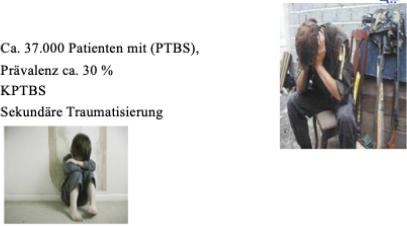
- PTBS, KPTBS
- Komorbide Erkrankungen: Depressionen, Suizid, Suchterkrankungen usw.
- ↑ Morbidität
- ↑ Mortalität
- Stigmatisierung: PTBS↑
  
- Andere psychosoziale Probleme



6

### PTBS in Kroatien

- Ca. 37.000 Patienten mit (PTBS),
- Prävalenz ca. 30 %
- KPTBS
- Sekundäre Traumatisierung




08.03.22 08.03.22

7

### Dissertation

*„Ich bin immer noch hier“*  
Die Rolle von Religiosität und Spiritualität bei traumatisierten Patienten in Kroatien




08.03.22 08.03.22

8

### Übersicht

- Zur Fragestellung
- Die Studie und ihre Ergebnisse
  - Methode
  - Ergebnisse
- Grenzen der Arbeit
- Gewinn der Arbeit
- Ausblick



08.03.22 08.03.22

9

### Zur Fragestellung

- Welche Rolle spielt Religiosität und Spiritualität bei traumatisierten Patienten in Kroatien
- Welchen subjektiven Nutzen für die Bewältigung ihrer Erkrankung schreiben die Patientengruppen ihrer ReS zu?
- Wie zufrieden sind diese Patienten in ihrem Leben?
- Spielen ReS eine Rolle in der Vergebungsbereitschaft bei traumatisierten Patienten?

08.03.22 08.03.22

10

### Methode

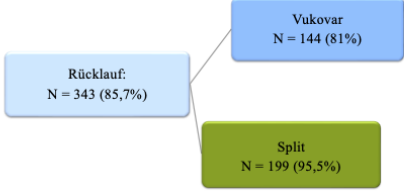
- Kliniken**  
Psychiatrische Klinik Vukovar und Klinik für Psychiatrie, Universitätsklinik Split
- Einschluss der Befragten für diese Präsentation**  
Patienten (Veteranen und Zivilpersonen) mit einer ICD- F43.1 und F62.0 Diagnose
- Instrumente**  
Spiritueller/Religiöser Einstellungen und Umgang mit Krankheit SpREUK, Spirituell religiöse Bedürfnisse (SpNQ), Religiös/spirituelle Bedürfnisse (SpNQ) Lebenszufriedenheit usw.
- Statistische Auswertung:** SPSS (Statistical Package for the Social Sciences) 25.0 für Microsoft Windows

08.03.22 08.03.22

11

### Ergebnisse

Rücklauf 85,7%



Rücklauf:  
N = 343 (85,7%)

Vukovar  
N = 144 (81%)

Split  
N = 199 (95,5%)

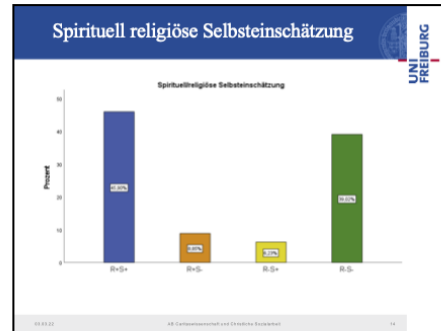
08.03.22 08.03.22

12

**Ergebnisse**

- N = 343
- 76,0 waren Männer, 88,7% katholisch
- 57,7% aktiv ganze Kriegszeit (5 J)
- 22,4% > als 20 Jahre in Behandlung, 22,2% < als 5 Jahre
- 88,2% der Patienten gibt an, heute noch an psychischen und physischen Folgen ihrer Erkrankung zu leiden
- 86,8% der Patienten nennt die Teilnahme in Krieg und die Kriegserlebnisse als Grund ihrer Erkrankung an

13



14



15

**Patienten (P) mit Traumafolgerkrankungen**

**1. Sinnsuche**  
Für 63,9% der Patienten waren Fragen nach dem Sinn im Leben und der Krankheit wichtig  
74% wünschten sich, dass ihr bisheriges Leben Sinn und wertvoll war  
73,7% einen Sinn in Ihrer Krankheit bzw. Lebensbeeinträchtigung sehen zu können  
empfanden weniger Sinn in ihrem Leben, besonders bei denen die noch sehr unter den Symptomen der Erkrankung gelitten haben

**2. Lebenszufriedenheit**  
36,8% waren nicht zufrieden und fühlten sich schrecklich oder unglücklich  
ReS- Patienten hatten geringere LZ

16

**3. Umgang mit der Erkrankung**  
P, die ein größeres Vertrauen in eine höhere religiöse Instanz (Gott) hatten, gingen besser mit den Symptomen ihrer Erkrankung um.  
P, die als Veteranen den ganzen Krieg (5J) erlebt haben, waren signifikant mehr auf der Suche nach einer religiös/spirituellen Unterstützung.  
Mehr als die Hälfte der P. äußerten, dass sie durch ihre Rel/Sp mehr Kraft im Alltag bekommen.  
Mehr als die Hälfte der P. empfanden, dass Res ihre innere Kraft in Alltag unterstützt

**4. ReS Bedürfnisse**  
61% bezeichnete sich als religiös oder spirituell  
81,8% der Patienten hatten mittlere oder große Bedürfnisse nach innerem Frieden.  
63,6% der P. hat das Bedürfnis selber zu beten, 49,8% der P. wünscht sich, dass „jemand für sie betet“

17

**5. Vergebung**  
72,2% hatten das Bedürfnis, jemandem aus einem bestimmten Abschnitt Ihres Lebens vergeben zu können  
P, die aktiv im Krieg teilgenommen haben, waren signifikant weniger bereit jemandem zu vergeben und hatten auch weniger das Bedürfnis, dass ihnen vergeben wird  
religiös und spirituell bezeichneten, verspürten ein signifikant größeres Bedürfnis jemandem zu vergeben, hatten ein größeres Bedürfnis, dass ihnen vergeben wird

18




### Gewinn der Studie

- Bisher keine soziologische Studie in Kroatien
- Die Ergebnisse dieser Studie belegen bislang kaum beachtete Rolle von ReS bei traumatisierten Patienten in Kroatien
- gewonnenen Erkenntnisse könnten einer besseren interdisziplinären und interreligiösen Kommunikation und Diskussion zwischen verschiedenen Akteuren dienen
- Förderung von Versöhnungs- und Friedensprozessen
- spirituellen Aspekten in der Bewältigung und in der Behandlung psychisch Erkrankter

19

### Ausblick

- Weitere Forschungen in diesem Bereich und mit anderen Berufsgruppen
- besseren Versorgung und Therapien in Form von Vorträgen, Workshops, Kongressen weitergeben
- Kurse und Fortbildungsveranstaltungen in Vereinen
- Therapiestrategien bzw. ergänzende holistische Therapiekonzepte
- Seelsorge



20

- Die Kirche sollte auch Initiative ergreifen und sich mehr mit entsprechenden Angeboten für traumatisch erkrankte Menschen einsetzen.
- Im Blick auf die neuesten kriegerischen Entwicklungen in Europa kann leider mit steigender Anzahl kriegstraumatisierter und retraumatisierter Menschen gerechnet werden. Viele dieser Menschen finden Trost, Hoffnung und Kraft in ihrem Glauben, als eine wichtige Ressource in der Begleitung und Verarbeitung erlebter schrecklicher Ereignisse und Erkrankungen, die sich daraus entwickeln können.

21

### Eigene Publikationen

- Glavas A., Karin Joes, Arndt Büssing, Klaus Baumann, Spiritual Needs of PTSD Patients in Croatia and Bosnia-Herzegovina: A Quantitative Pilot Study. *Psychiatra Danubina* 2017, 29-3, 282-290.
- Glavas A. (2018) Traumatische Erfahrungen am Beispiel des Krieges in Kroatien. In: Klaus Baumann, Rainer Bendel, Deografias Marinkuro (Hg.): *Flucht, Trauma, Integration, NachkriegsEuropa und Ruanda Burundi: ein Vergleich*. Berlin-Münster-Wien-Zürich: Lit Verlag 2018, 97-106.
- Glavas A., Arndt Büssing und Klaus Baumann. Religiöse und spirituelle Bedürfnisse bei traumatisierten muslimischen Patienten in Sarajevo. *Spiritual Care* 2020 (ahead of print: 16.06.2020). <https://doi.org/10.1111/spc.12444>
- Glavas A. (2019) Nach Srebrenica: Verzeihen ist die beste Rache. *Theologische Fulleitton*. <https://www.zeitung.de>
- Glavas A., Klaus Baumann (2021) Spiritual Needs in Postwar Population Posttrauma Patients in Croatia and Bosnia-Herzegovina. In: Büssing A. (eds) *Spiritual Needs in Research and Practice*. Palgrave Macmillan, Cham. [https://doi.org/10.1007/978-3-030-71112-0\\_24](https://doi.org/10.1007/978-3-030-71112-0_24) /first online 29th May, 2021).
- Glavas A. (2022) Ich bin immer noch hier! Die Rolle von Religiosität und Spiritualität bei traumatisierten Patienten in Kroatien, Dissertation an der Universität Freiburg. Wird demnächst publiziert.
- Glavas A. (2022) Einfluss der traumatischen Kriegereignisse auf die Gesundheit der Menschen in Kroatien. *Mitteilungen des St. Gerhardswerks e. V. und des Süddeutschen Priesterwerks e. V.* Wird demnächst publiziert.

22

### Vielen Dank für Ihre Aufmerksamkeit

Für Kontakt und weitere Informationen incl. Bibliographic

Dr. med. Andrijana Glavas Ph.D.

Emails: [andrijana.glavas@theol.uni-freiburg.de](mailto:andrijana.glavas@theol.uni-freiburg.de)



23

菊地 了 (きくち りょう) (グローバル・コンサーン研究所・上智大学文学部)